
LUCK - 9999

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LUCK - 9999

【Nコード】

N8128W

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

主人公の高原幸一は下校途中、車にはねられて死んだ。そして周りを悲しませた罰として実質上、異世界にある屋敷に軟禁されてしまう。

この境遇から解放されるには善行を積むしかない。幸か不幸かトラブルは向こうからやってくる。

そしてそれを解決していくうちに知るこの世界の闇。

異種族の違いによる差別、そして繰り返される戦争によって憎悪と悲鳴が渦巻くイースペリア大陸。

高原幸一はそこで一体何を考えるのか。

人物紹介（前書き）

2012/1/3更新

人物紹介

コウイチ「タカハラ

分類 人間

種族 人間

年齢 17歳

立場 館の主

役割 薬の調合

交通事故により死亡。死んだことによつて迷惑を掛けた罪としてLUCKが-9999となり、この世界に飛ばされる。

元から受け身な性格だったが、この世界はトラブルがやってくるので、その傾向がより顕著になった。

突っ込みを入れることはあるが、基本的に怒ることはない。来る者は拒まず、去る者は追わずというスタンス。

素材と設備さえ揃えば例え核であろうと作ってしまう。ただ、そうになると設備を作らなければならず、また本人もそんなものを作る気はないので今ある設備で作れない物は諦める。

シヨコラ「シュガーレス

分類 亜人

種族 狼

年齢 20歳

立場 メイド長

役割 屋敷の管理

コウイチと最初に出会った人物。

普段は面倒見の良いお姉さんなのだが、理性のタガが外れると神人すら殺せる恐ろしい化け物と化す。

人間に対する憎悪が深いのだが、コウイチと出会ってからその心境

に変化が生じている模様。

例えば昔なら人間の街に赴く際には絶対にメイド服と首輪を着けなかったが、現在だと余計な諍いを生みたくないので大人しく着けるほど心の余裕が出来た。また、何故か自分を犬の亜人と偽っている。

アロウ＝キルスロイ

分類 亜人

種族 鴉

年齢 10歳

立場 ハクアの兄

役割 薬の売り子

シヨコラが買った奴隷。

まだ10歳の子供らしく、思ったことを口に出す性格。反抗心が強いので亜人に立場に怒りを覚え、実際に口へ出すのだが、シヨコラに己の非力さを指摘されたことから、強くなりたいと願うようになり、シヨコラとギアウツドの2人と稽古をしている。

ハクア＝キルスロイ

分類 亜人

種族 鷺

年齢 9歳

立場 アロウの妹

役割 薬の売り子

シヨコラが買った奴隷。

アロウをお兄ちゃんと呼んで傍に付き従っている。その儂げな容貌と同じく、自分からは滅多に自己主張をすることを無かったのだが、ベルフェゴールとルクセントールと接している内に相当遅くなった。そして魔法の才能があるらしく、2人を師事している。おそら

く屋敷の住人の中で最も性格が変わった人物。コウイチ曰く「白は染まりやすいからな」と評している。

ベルフェゴールⅡサキュトレス

分類 神人

種族 魔族

年齢 不明

立場 皆のお姉さん

役割 店主

幻術を扱えるので店に来る悪質なクレーマー対応になっている。どんな時でも小さい子の味方という変な信念があるのだが「魔族だから」という一言で全員が納得してしまう。普段はお茶らけた言動を取っているが、その実最も大人であり一歩引いた場所から意見することが出来る。自由時間は図書室にいる場合が多く、よくそこでコウイチと論議を交わすことが多い。

ギアウッドⅡウエスタン

分類 神人

種族 巨人

年齢 不明

立場 父親

役割 力仕事担当

突然夜中に壁を揺らして呼び出すという荒業を敢行した。武士言葉を話す通り、普段は泰然自若とした性格なのだがその分怒らせると怖い。屋敷の住人の中でもアロウがギアウッドを頼っており、自由時間の時にはよく一緒にいる。

ルクセントールⅡガラヤキア

分類 神人

種族 エルフ

年齢 不明

立場 母親

役割 補佐

穏やかな性格で、包み込むような温かさを持つ。身重なので激しい動きはできないが、住人の中で最も器用なので忙しいと思われる人の補佐をする。そのため皆の負担が半分以下にまで減った。ハクアがルクセントールに懐いている他、ベルフェゴールと話を合わせることが出来るためよく図書室にすることが多い。

1話 始まり（前書き）

皆様の意見を参考にして新しく書き直しました。
納得して頂けると幸いです。

1話 始まり

『交通事故で死んだ享年17歳の高原幸一へ』

「は？」

何故か俺はどこか分からない部屋におり、そしてソファに腰掛けて手紙を広げていた。

『言いたいことは色々あるだろうが、まずはこの手紙を読み進めて欲しい』

手紙に先を促されるのは癪だが、その通りなので俺は文に目を走らせる。

『お前はつい先程、飲酒運転をしていたドライバーに赤信号なのに突っ込まれ、全身を強打して死亡。そこまではいいか？』

確かに俺は高校の帰り道、交差点を渡っていたはずなのだが、道路の真ん中辺りからの記憶が無い。おそらくそこではねられたのだろう。

『お前が死んだことで両親は勿論のこと、友人、学校、そして警察まで多大な迷惑をかけてしまった。ゆえに、お前は人を悲しませ、迷惑をかけてしまった罪により賽の河原の刑が妥当だ』

「おい、それはおかしいだろう！」

こっちは一方的に巻き込まれた被害者なのに、どうしてその上罰

を受けなければならないのか。まさしく泣きつ面に蜂だ。

『が、事情を鑑みるとそれはあまりに厳しすぎるのではないかと考え、お前には別の償いをしてもらうことになった』

「……それは喜んでいいのか？」

最悪のケースは免れたものの、罰を受けることに変わりはないらしい。

『そして、お前の罰は幸運が最悪になり、全ての行動が裏目に出るような刑に処した。分かりやすそうな例を挙げると、お前が何かを買おうとして外に出ると急に雨が降り、不良からカツアゲを受けた拳句殴られ、ボロボロになりながらも店に辿り着いても商品は売り切れで帰り道に財布を落とす。そして拳句の果てには犯罪者と似ているという理由で留置所に一晚過ごすことになる』

「ちょっと待て！ それは酷過ぎないか！」

『が、安心しろ。そうなるのはこの屋敷から一步外に出た時点から始まる。つまり、お前はこの屋敷に閉じ込められたわけだ』

「どこを安心しろと言うのかゆっくりと話し合いたいな」

『そして、お前がいる場所だがここは地球ではない。中世時代に剣や魔法、異種族が登場するイースペリアという世界だ』

「うん？ どういうことだ？」

『お前はもう死んだ人間だ。死んだ人間は元の世界へと戻ることが

出来ないのだ。そこは諦めるしかない』

「……もう会えないのか」

思い出すのは父さんや母さんの顔、友人との他愛のない話や、少し気になる子の笑顔。

『感傷に浸っている場合ではないぞ』

何故か手紙に怒られた。

『お前には3つの贈り物を贈る。まず1つはこの屋敷だ。敷地内において外部と接する面に道具屋が設置されているからそこで日々の糧を得るが良い。なお、最初はサービスとしてこの屋敷に設置されている納戸や倉庫には素材を一杯にしておいたぞ』

「ありがとうと言っておくべきところか？」

『2つ目にお前はこの時代において住人と話せるよう言語と、作れない物は無いよう技術と知識を与えておいた。試しに何かを想像して作ってみる』

俺は書かれていたように、想像してみる。

「そうだな、睡眠ガスと似たようなものは作れないかな」

俺がそんなことを考えると、急に頭の中にそれを作るための素材や手順が再生された。

そしてそのまま納戸から草を数種類か選んで頭の中に浮かんだ通

りに作ってみる。

「……この甘い匂いはクロロホルム？」

瓶に入った液体を見てそう評する俺。

どうして草からこんな化学薬品が作れるのか分からないが、少し吸うと咳や吐き気を催すことからクロロホルムで間違いないだろう……何で俺はこんな知識を知っているんだ？

『それも私が与えたものだ』

「そうなのかよ……」

俺は手紙を読んでいるはずなのに、会話をしていると錯覚するのは何故だろう。

『そして、最後の贈り物だが。お前の行動次第でLUCKが変動することだ。善行を積むとLUCKが上がり、悪業を行うと下がる。上を向いてLUCKと念じて見るとよい』

書いてあるままに念じると視線の先に『LUCK - 9999』という文字が浮かび上がっていた。

『それはお前しか見えないものだ。この世界に住んでいる者は地球と同じく、運が数値化されて表示することはないから誤解するなよ』

つまり油断すれば子供にでも殺されるということだろう。

そこは現実と一緒だな。

「なあ、俺はどうやって善行を積むんだ？ 延々と道具を作り続け
て売ればいいのか？」

外に出ることはできず、ただ道具を作り続ける——それはそれで
苦痛だな。

『安心しろ、そんなことはない』

その続きは。

『何故ならトラブルは向こうからやってくるのだ。お前はただ待つ
ていれば良い』

「それはまた災難だな」

『人生もそんなものだ。トラブルというのは自分に非が無くとも訪
れるもの。さて、高原幸一よ。これから先苦難が続くと思うが、お
前なら乗り越えて見せるだろう……頑張れ』

その文字と同時に俺から最も離れた位置にある窓ガラスが破られ
て何者かが侵入してきた。

「……犬耳？」

銀色の髪を肩に切り揃え、スタイルもそれほど悪くないのだが、
何故か犬耳と尻尾が生えている。

「どうしてそんなにボロボロなんだ？」

例えるなら飢えた猛獣。擦り切れた衣服を身に纏い、頬はこけて目がギラギラと輝いている。

俺と同じ１７歳ぐらいに見えるのに下手に近づけば食い殺されそうな雰囲気を漂わせていた。

「……死ね！」

犬耳娘が殺気を振りまきながら手に持った剣で斬りかかってくる。

身体能力は高いらしく、後数歩で俺の元まで辿り着きそうだった。

このままだと俺はあの犬耳娘が持った剣によって斬り殺されるだろう。が、そんなわけにはいかなかったので俺は先程作ったクロロホルムを床に投げつけた。

瞬間的に揮発したそれは俺が息を止めたにもかかわらず目や喉に痛みが走ったがそれだけで終わる。

俺はその程度で済んだのだが、犬耳娘はそういかなかったようだ。

犬の嗅覚は人の数千から数万倍。それに加えて不意を打たれた出来事だったので、犬耳娘はものも言わず、一瞬で昏倒した。

「やれやれ、いきなりトラブルが舞い込んできたな」

気絶した犬耳娘を睥睨しながら俺はそう呟く。

振り返れば俺は数時間前まで普通の高校生だったのだが、何かの因果によってこの世界で罪を償うことになった。

納得しているかと問われれば頷くことはできないが、納得しないからと言って辞めることはできないのなら反抗するだけ無駄。

「まあ、やるだけやってみましようかね」

先程まで読んでいた手紙が自然発火し、跡形もなくなっていくのを見た俺はそう決意した。

1話 始まり（後書き）

もうお分かりと思いますが、この犬耳娘はシヨコラです。

2話 ショコラとの出会い

この屋敷には地下牢もあるらしい。

何でそんなものまで設置されているとかはもう突っ込まない。

だから俺は侵入してきた犬耳娘をまずはそこに置いて、料理とある物を作ってからまた戻ってきた。

「殺す殺す殺す殺す！」

どうやら向こうは興奮状態らしい。

俺の姿を認めた瞬間目を血走らせて狂ったように鉄格子を揺さぶっていた。

「まあ……予想通りだよな」

最初の出会いかからある程度予測していたとはいえ、実際にその通りとなるとヘコムものがある。

「まさか始めからこれを使う羽目になるとは思わなかった」

そう呟きながら取り出したのはハーブの一種であるカモミールとよく似た効能を持つ植物をすり潰した粉。

カモミールは興奮を抑えて安静にさせる作用があるので、その粉に火を付けて香を炊く。

この地下牢の空気の通路は出入り口なのであつという間に香りが充満する。

犬の鋭い嗅覚も手伝ったこともあり、犬耳娘は見る見るうちに落ち着いていった。

「落ち着いたか？」

俺の問いに犬耳娘は憎しみを込めた視線で返答する。

「はあ……まあ良い。ほら、食事だ」

俺はため息を吐きながらスプーンと小皿と水を渡し、そして取り出し口に大皿に入った肉と野菜の炒め物、そしてパンを置いた後、俺は座って自分用の小皿とスプーンを出した。

「ん？ 何かおかしいことでもあるのか」

別用のスプーンで大皿から小皿へ自分の食べる分を移していると、犬耳娘は信じられないと言う風に目を見開いていた。

「……どうして一緒に食べるの？」

どうやら俺と一緒に食事を取ることが信じられないようだ。

「お前には聞きたいこともあつたし、そろそろお昼時だからちょうど良いかなと思ってな」

俺は本心からそう述べたのだが、犬耳娘は首をブンブンと振り始める。

「嘘よ嘘！ 人間がこんなに優しいわけがない！ これはあれね！
こうして私の反応を見て楽しんでいるのね！」

どうして一緒に食事を取る程度でそこまで邪険な態度を取られるのか理解不能だったが、とりあえず俺の行動は犬耳娘の常識からするとありえないということが分かった。

「まあ、何だ。冷めるから早く食べた方が良い」

「食べるわけがないじゃない！ 人間が——」

犬耳娘はいきり立って拒否しようとするが。

キュルルルル

体は正直だった。

犬耳娘は真っ赤になりながら小皿とスプーンを取って食事を始めた。

「ふうん、人間にしては美味しい物を作るじゃない」

犬耳娘は全て食べ終え、唇に付いた汚れを舐め取りながらそう感想を漏らす。

「……お前はもう少し加減しろよ」

俺がジト目で睨むのは用意した料理の大半を全て犬耳娘に食われ、結果的に俺は最初にとった分しか食べられなかったからだ。

「仕方ないじゃない。しばらく草の根や昆虫しか食べていなかったから、こういうまともな料理は久しぶりなのよ」

悪びれもなくそう言い放つので俺はもう追及を諦めた。

「もういい……で、本題に入って良いか？」

俺の言葉に場の空気が一瞬で変わる。

先程までカラカラと笑っていた犬耳娘は鋭い目つきへと変化した。

糸が張り詰めるような沈黙の中、俺が発した言葉は。

「ここはどこだ？」

「……は？」

またも沈黙状態へと変わったが、今回は呆れの要素が強い雰囲気だ。

「ここはイースペリア大陸のどこにあたる？ で、近くに街などはないのか？」

「え？ ちょっと待って。あんだ、もしかして記憶喪失？」

犬耳娘のうろたえに俺は首を振る。

「信じてもらえないかもしれないが俺は別世界にいた。知っている

のはこの世界の大陸名と剣や魔法、そしてお前の様な異種族が存在しているということだけだ」

犬耳娘は俺の言葉をどう解釈していいのか迷っているようだ。せわしなく尻尾を動かす様子からそう判断できる。

「えーと……あんたの名前は？」

「高原幸一」

「珍しい名前ね。それで、出身地は？」

「東京だ」

「トウキョウ？ ……まあ良いわ。あなたは何の種族？」

「種族と言うのは族名と言うことか。それなら俺は日本人だ」

そこまで答えると犬耳娘は額を抑えて天を仰ぐ。

「あー……こりゃ私はとんでもない出来事に遭遇したみたいね。話の筋は通っているけど、出てくる言葉は全然知らないことばかり」

「俺からしてもとんでもない出来事なのだから」

突然死んで異世界に飛ばされ、そして状況を理解する間もなく犬耳娘から殺されかけるという場面に出くわしたのは俺が始めてだろう。

「とにかく、俺としては今の状況を知りたい。ここがどこで、何の

風習があるのか知らないと何もできないからな」

「それなら近くに大きな都市があるからそこに行けばいいじゃない。あそこは人間が支配する国の都市だから同族のあんたなら優しく接してくれるわよ」

「そうしたいのだが、生憎俺は呪いによってこの屋敷の敷地内から出ることを許されない。正確には敷地内を囲っている塀から先には行けないんだ」

「あの無駄に高くてつるつる滑って登れなかったあれね、どうしても出られないの」

「俺がこの屋敷から出た瞬間俺にありとあらゆる不幸が起こってしまつらしい」

「それを信じる根拠は？」

「俺がこの屋敷にいることと、見たことも無い薬や料理を簡単に作れたことから信じている」

一通りそう答えると犬耳娘は頭がガシガシと掻き始める。

「……正直私の手には負えないわ。何よこれ、飢えと渴きが限界に達したので、どこでも良いから人間の住む民家を襲おうとして入った先がこんなとんでもない場所だなんて」

そんな理由で見ず知らずの俺を殺そうとしたのか。

どうやら犬耳娘からすると人間は相当嫌悪すべき存在らしい。

「で、俺の質問に答えてくれるか？」

俺がそう催促すると、犬耳娘は呆れたように溜息を吐く。

「……シヨコラよ」

「うん？ 何が？」

俺が聞き返すと犬耳娘は少し怒ったような言い方で。

「私の名前はシヨコラよ。あんただけ名乗らせておきながら私だけ名乗らないのはおかしいじゃない。だから私の名を教えたのよ」

シヨコラは俺に僅かなりとも心を許してくれたらしい。その事実
に俺は嬉しくなる。

「何よその笑顔、腹が立つわね。けど、まあ良いわ。それよりもこの世界の常識について教えてあげるからまずはここから出なさい」

俺は頷いて牢屋の鍵を開ける。

「次にどこかシャワーが使えるところはないかしら」

「ん？ どうしてだ？」

俺が尋ねるとシヨコラは顔を赤くしながら。

「まずは体の汚れを落としたいの！ それぐらい察しなさい！」

何故か怒られる羽目となった。

だから俺は屋敷の浴槽室へ連れて行き、そこでの使い方を一通り教えた後、終わったらリビングに来てくれとそう伝言を残してその場を去った。

現在のLUCK - 9989

2話 ショコラとの出会い（後書き）

ショコラは17歳ぐらいの容姿という描写を第1話に追加しました。

3話 世界の現状

シヨコラがシャワーを浴びるまでの間、俺はリビングに備えられている椅子に座って思案する。

「少なくともシヨコラは人間に対して憎悪を抱いている」

なぜそんな恨みを抱くまでに至ったのか分からないが、初対面時の殺気は想像を絶するものだった。あの時は状況をうまく呑み込むために、副交感神経から過剰なノンアドレナリンが分泌されている状態だったので、ああも冷静に対応できたが、今も同じことを取るかと問われれば首を振る。

おそらく手負いの獣に似た狂気に充てられて体すらまともに動かせなかっただろう。

「とにかく、異種族と接するときにより無防備な対応を取っては危ないな」

シヨコラはまだ直情的な性格だったから良かったものの、もし笑顔で殺すタイプだったのなら、俺は間違いなく死んでいただろう。

「ふう、いいお湯だったわ」

そこまで考えていると、リビングのドアが開いてそんな声が響く。

「ああ、シヨコラか。遅かったな」

「だって温かいお湯で体を洗うことが気持ち良かったの。今まで水

でただ拭いただけだったから」

シヨコラはお湯を浴びてすっきりしたようだ。

予め用意してあった白のブラウスと青いロングスカートに身を包んだシヨコラは心底嬉しそうだった。

尻尾もスカートの中で元気よく動いている。

「さて、私の知っている範疇でこの世界の常識を教えるわね」

俺と相對する場所にあった椅子に腰かけたシヨコラはそう切り出す。

「まあちょっと待て。風呂上りなのだからこついうのも良いだろう」

俺はテーブルに置いてあったぶどうジュースを注ぐと。

「あら、悪いわね」

シヨコラはそう断ってからそれを一気に飲み干した。

「美味しかったわ、ありがとう。さて、喉も潤ったことだし話を始めるわ」

そう前置きした後シヨコラはこの世界の常識について話し始めた。

「このイースペリア大陸には3種類の種族が住んでいるわ」

まずは俺のような人間。

人間はこれといった特徴がなく、ただその爆発的な繁殖力と残虐な排他性によってこの大陸のトップに立っているという。

「一匹じゃブルブルと震えて命乞いするくせに、集団になると高圧的になる最悪の種族よ」

と吐き捨てるように人間をそう評する。

「何かもう、ごめんな」

俺は居た堪れなくなって謝罪をする。

「別にコウイチが気にすることはないわよ。あなたは変人だから」

シヨコラがフォロー（？）してくれた。

「次が私達獣の特性を持った亜人。私達は身体能力も魔力も種族によつては人間よりも上よ」

亜人はこのイースペリア大陸で最も種類が多く、その多様性は誰も網羅できないほど多いらしい。

「なまじ優れているせいか亜人は連携が苦手なのよ。私達はどれをとつても人間より優れているのに」

個々の能力が優れ、種類も多すぎるため意思疎通ができないので人間の下に甘んじているわけか。

「亜人を統率するような人物はいないのか？」

「大昔はいたそうだけど、今はそんな人物の存在が現れそうなものなら、すぐに人間によって摘まれちゃうわ。全く、弱いくせに危機だけは敏感なんだから」

少なくとも亜人達が連携の動きを見せたら人間はそれを鎮圧するってか。合理的な判断だなと思う。

「そして最後が神人。エルフや魔族、竜人そして巨人族など人とも動物とも似ていない種族がごく少数ながら存在しているわね」

この神人は俗世を避け、山頂や樹海の奥深く、そして地下など人が住めない辺境に住んでいるという。

「あいつらは人間など相手にすらないんだから、下界に降りてきて彼らを懲らしめてほしいものだわ」

人間より遥かに長い寿命と圧倒的な力を持つ神人はそれ単体で人間の編成する1000人規模の軍なら普通に相手できるらしい。

「神人は己の力の大きさを知っているからこそあまり表に出たがらないのだろう」

「そうは言っても限度があるわよ、このままじゃ知らぬ存ぜぬを貫き通すならいつか増えすぎた人間によって滅ばされるわ」

シヨコラはよほど人間が嫌いらしい。

イスペリア大陸に住む種族について話していたのに、いつのまにか人間に対する悪口へとなっていた。

「……まあ、とにかく。この世界に住む種族については大体分かった」

一通り聞こえた俺は一息吐く。シヨコラも愚痴を言いきってスッキリしたのか晴れやかな表情だ。

「そして、今さらだがシヨコラ。俺の元で働かないか」

俺はそう提案する。

「俺はこの屋敷から外に出ることはできないので素材や食料の調達ができない。だから代わりにシヨコラが買ってきてほしいのだが」

シヨコラはしばらく真剣に聞いていたが、それはものの数秒で表情を緩める。

「本当に今さらね」

と、肩を竦ませながら息を吐いた。

「それじゃあ」

「どの道、ここを追い出されたらまた路頭に迷うしかないわね。そう考えると私にとって受けない選択肢はないわよ」

俺が目を輝かせるとシヨコラはニコリと微笑む。

「良かった、ありがとう」

俺が手を掴んでブンブン振ると。

「分かったから少しは落ち着きなさい。手がちぎれるわ」

シヨコラはそう俺を窘めた。

屋敷の中を一通り案内し、シヨコラが住む部屋を決めた俺達は再びリビングに戻る。

「と、いうことでシヨコラ。お前には今すぐ近くの街へ行ってきてほしいのだが」

俺はそうシヨコラに切り出すと。

「は？ 何で？ まだまだ蓄えが一杯あるでしょ」

シヨコラは首を傾げる。

シヨコラよ、お前は3時間前ほどやった所業を忘れたのか。

「お前が叩き割った窓の修理のための素材。残念ながら倉庫の中には炭酸ナトリウムがない。そしてそれを作るためにはソルベ―法に則ると炭酸カルシウムとアンモニア、そして食塩と水が必要なわけだ。食塩と水はあり、アンモニアもこちらで用意するから石灰石を買ってきてほしい」

「炭酸カルシウム？ アンモニア？ それって何の呪文？」

シヨコラは俺の言った単語を全く理解できていないようだ。尻尾が？マークを作っている。

「とにかく、石灰石を買ってくればそれでいいのね」

シヨコラの問いに俺は頷く。

「まあ、ここから近くの都市まで15分程度だから夕食には戻れるわ」

「15分？ そんなに近いのか」

15分ならここからでも都市が確認できるだろう。

しかし、シヨコラは首を横に振って。

「距離に換算すると約10kmよ」

「10?!?」

おい、15分で10?ということは時速に換算すると約40?で、それは短距離100mを走ると同じぐらいのスピードだぞ。

それを全く速度を落とさず10?も走れるのか?

「フッフ、甘いわね。私は犬の亜人よ。これぐらいの距離なら散歩でもできるわ」

シヨコラが自信満々に言い放つ様子からそれが真実だと思い知る。

「分かったよ、もう何も言わない。だから早いところ石灰石を1?買ってきてくれ」

そのためにポケットに入ってたコインを渡すと。

「ちょ!?! 白金貨? あんたいったいどれだけ買うつもりよ!?!」

シヨコラが驚いたので俺は目を見張る。

「結構買えるのか?」

「当たり前よ! 白金貨1枚あれば高級奴隷が2人も買えるわ!」

どうやら神様はそんな高級な貨幣を俺のポケットに忍び込ませていたらしい。

「白金貨1枚で金貨100枚分! 金貨1枚で銀貨100枚分!そして銀貨1枚で銅貨100枚分なのよ!」

つまり白金貨1枚で銅貨が100万枚の価値があるということか。

それは大きいな。

「言っておくがもう金はないぞ。だからそれを使い果たすと俺達は物が売れるまで倉庫に入ってある食料だけで過ごすことになるからな」

そんな大金だとは知らなかったの、俺は使いすぎるなと言い含めた。

「分かったわ。街に行ってくるからメイド服と首輪を用意して頂戴」

「……は？」

突然出てきた単語に今度は俺がフリーズする。

「シヨ、シヨコラ……お前まさかそんな趣味が」

「そんなわけないでしょう！」

俺が震えながら尋ねるとシヨコラは顔を真っ赤にして否定する。

「人間の街のルールなのよ。私達亜人の着る服は使用人が着る服のみ、そして首輪をつけてドッグタグに雇い主の名前と住所を記しておかなければならないの」

何というか本当に亜人をペットや家畜としか見ていないようだ。

その事実には俺が顔をしかめていると。

「コウイチがやったことじゃないから気にする必要はないわよ」

シヨコラがそう慰めの言葉をかけてくれる。

「私もそんなのを着けるのは屈辱だけど、今はそんなことを言ってもらえないわ。とにかくサツサと買い物を済ませて一秒でも早く都市から離れるから」

シヨコラがなんでもない風に体をほぐし始めた様子を見ると幾分か俺の心の気が晴れた。

「……遅い」

リビングに腰かけていた俺はそう漏らした。

シヨコラは1時間もあれば戻ってくると言っていたが、すでに2時間が経過している。

「もしかするとあのまま逃げたか？」

金貨を持って逃亡——その予想もあながち外れではないのかと疑い始める。

「……まあ、いいか」

もしそうだとしても、それは俺が迂闊だったということだ。

焦らなくとも在庫なら1年は持つだろうし、あの金貨を持っていてもここから出られない俺にとっては宝の持ち腐れだっただろう。

「幸か不幸かトラブルは向こうからやってくるんだ。今回はこの世界にすむ種族というのを知れただけでも良かったとするか」

俺はそう納得させて立ち上がると同時に玄関のドアが開く音が響いた。

「ごめんごめん、遅くなっちゃって」

玄関にまで迎えに行くと俺が注文した石灰石の袋を持っていた。

「いや、帰ってきたのなら別にいい」

俺はシヨコラに向かってそう声をかけたのだが、よく見るとシヨコラの後ろに翼の生えた亜人の子供が2人いた。

いくら子供だといっても2人であり、シヨコラも体が太いほうではないので隠しきれていないし、その翼が目立つ。

「おい、後ろの子達はなんだ？」

黒い翼を持つ少年と白い翼を持つ少女を指さしながら俺はシヨコラに問う。

するとシヨコラは頬を掻きながら。

「えーと……ちょっとお買い物」

尻尾を忙しく動かしながらそんなことをのたまうシヨコラ。

「でもね、酷いのよ！ 私が少し奴隷市場を覗いたら、こんな年端もいかない少年少女を売ろうとしていたの！ あのままだと2人とあの脂ぎった体の人間どもに買われてどんな酷い目に合わされるか分からなかったから——」

「いや、言い訳はいいから。で、いくら残った？」

俺の追及にシヨコラはおずおずとポケットに手を入れ、数枚の銅貨を取り出して見せた。

「……」

銅貨１００万枚の価値がある白金貨を渡し、それが銅貨数枚になつて返つてきた俺が絶句しても仕方ないだろう。

「「「「「……」」」」」

そして辺りに横たわる重たい沈黙。

「ああ、そういえばこの子たちの自己紹介がまだだつたわね」

何とかこの雰囲気を払拭しようとシヨコラがことさらに明るい声を出す。

「この黒い翼を持つ少年がカラスの亜人のアロウ。鳩とか雀とかの血も混じった雑種だけど、この反抗的な雰囲気からシヨタツ気がある人間が熱視線を送っていたわ」

「ふんっ」

身長はシヨコラの腰辺りまでしかない。

真っ黒な翼に髪、瞳と黒ずくめであり、顔だちも１０歳ごろの少年らしい愛らしい顔つきなのだが、如何にも「お前の言うことは信じない」という空気を辺りにまき散らしていた。

「そしてこの子が鷲の亜人のハクア。この白い翼を見れば分かる様に彼女は血統書付きの純血よ。この儚くも神々しい雰囲気のために馬鹿な人間どもが下卑た笑いを浮かべていたわ」

「……こんにちは」

こちらはアロウより身長が少し低い程度。

純白の翼に光り輝く金色の髪、そして宝石の様な蒼を湛える様子はこの時点でも絵になりそうだ。しかもこれでまだ子供だというのだから将来が末恐ろしいことになると思ってしまう。

「ほら、大丈夫よ。この子達を落札する際しつかりと宣伝しておいたから。この子達が売り子をするの皆に言い含めていたので、多分明日にはそういった特殊な人間が山のように来るわよ」

変な客が訪れることのどこを喜べと言うのか。

俺は頭が痛くなってくる。

「そ、それじゃあ私はこの子達に住む部屋を案内させるわね。2階は結構部屋が余っていたからその内のどれかを使わせるけど良いかしら?」

「……もう好きにしてくれ」

シヨコラが2人を連れて2階に駆け上がっていくのを見ながら俺は辛うじてそう呟いた。

現在LUCK - 9969

3話 世界の現状（後書き）

アロウとハクア登場！

前作とどう変わったのかはまた次回に。

4話 ベルフェゴールの押し掛け

「絶対に俺はそんなことしないからな！」

夕食時。

一同が食堂に集い、ご飯を食べている最中にアロウとハクアに売り子をやってもらおうと提案すると、アロウが猛反発した。

「何で人間なんかに愛想振りまかなくちゃいけないんだよ！ 頭狂ってんのか？」

「お兄ちゃん、言い過ぎだよ」

アロウの隣で果物を頬張っていたハクアがアロウを窘める。

鷲の亜人は肉や魚を受け付けなく、必然的に野菜と果物だけで栄養を賄わなければならない。

そして、何故かハクアはアロウのことをお兄ちゃんと呼び、アロウもハクアのことを兄妹だと言い張っているが、それが嘘なのはバレバレ。今度機会があれば聞いてみようかと思っている。

「へえ、あんた何もしないつもりなんだ？」

ここでシヨコラが剣呑な雰囲気を漂わせながらアロウに聞く。

シヨコラはメイド服が気に入ったのか、屋敷に戻ってからでもずっと着けていた。おそらくこの先メイド服を着続けるだろうと予測

している。

「あ、当り前だろ。俺達は旅をしていると人間どもに攫われたんだ。だから釈放されるのが当然だ！」

ドッグタグを着けていない亜人は動物と変わりなく、攫われても罪には問われないらしい。

本当にこの大陸の人間は自分勝手だと痛感する一幕だ。

「それは私達以外にでも通用するのかしら。もし私があなた達を買わなければどうなっていたと思う？ その言葉を別の飼い主にも同じ口を聞ける？」

「あ、当り前だろ！」

そう強がっているものの、先程より威勢が無くなっている。

「まあ、それが通用するかどうかは分からないけどね」

シヨコラはフォークで肉を突き刺しながらそう呟いた。

「つ、通用するかどうかは関係ない、これは当り前の権利で——」

「黙りなさいクソガキ！」

アロウがなおも言い募ろうとしたがシヨコラの一喝によって黙らされてしまう。

「あんたは自分の立場分かって？ 口先だけ立派で実力はからつき

し、人攫いも撃退出来ずにこうして保護されている。はっ！ そんなガキが権利だなんて笑わせるわ！」

シヨコラはさらに弾劾する。

「いいこと？ この世界はいくら正論を吐こうが力が無ければ戯言にすぎないの、権利？ 当たり前？ 何それ？ そんなも——」

「もう良いだろうシヨコラ」

さすがにこれ以上は不味いと感じたので俺は仲裁に入る。

「シヨコラ、アロウはまだ子供だ。これ以上責めても仕方ない」

「けど、ここで釘を打っておかないとアロウはまた同じことを繰り返すわ」

シヨコラの言葉に俺は黙ってアロウを指差す。

「う……う……ぐすつ……」

そこには己の不甲斐無さに肩を震わせて俯き、必死で嗚咽を堪えている一人の少年の姿がそこにあった。

居た堪れない空気がこの食堂に満ちる。

「ハクア、済まないがアロウを部屋にまで連れて行き、面倒を見てやってくれないか」

「はい……」

これまでずっと黙っていたハクアが俺の言葉に頷き、アロウの背中を撫でながら部屋へ向かおうとする。

そして、2人が食堂から出ていく瞬間俺は口を開く。

「明日、やる気があるのなら朝の7時にここへ来てくれ。そして玄関に当分の食料と水を置いておくからもし出ていくのならそれを持って行ってほしい」

「お気遣いありがとうございます」

「いや、むしろ非礼を詫びるのはこっちだ。人間を代表して謝罪する、アロウとハクアを誘拐して本当に悪かった」

その言葉の返答はなく、2人は食堂から出て行った。

そして残される俺とシヨコラ。

「聊か言い過ぎたのではないか？」

俺の口調に多少棘が入るのは仕方ないだろう。

シヨコラはため息を吐きながら。

「ああいうクソガキを見ていると腹が立ってくるの。あんな御題目を唱えた所で力が無ければ無力だと言うのに繰り返し繰り返す馬鹿は苛々する」

「それはお前、もしくは親しい友人にアロウと似た者がいたのか？」

その問いにシヨコラは寂しく笑いながら「昔の話よ」とだけ答えた。

これ以上追及してもシヨコラは何も答えてくれないと悟った俺はただ紅茶を口に含む。

「……ありがと、これ以上何も聞かないでくれて」

シヨコラの呟きに俺は肩を竦めることで返した。

「はい、ポーシヨン3本と毒消し2本ですね」

ハクアが相手にしているのは主に男性客。

カウンター越しとはいえ、ハクアの手から直接渡されるので、貰った瞬間、ハクア的笑顔と相まって客は天に昇りそうな表情を浮かべる者が多かった。

「麻痺治し5本、ハイポーシヨン2本だ」

逆にアロウは女性客に商品を手渡している。

アロウはハクアと違って営業スマイルを浮かべず、ぞんざいな態度で接客をするのだが、女性達にとってはそれが堪らないらしい。「ツンデレ可愛い！」とか黄色い声を上げている。

そして2人が暇な時を見計らって俺は近づく。

「今日で一週間か、結構行列が続くな」

「はい、コウイチさんの作った薬の評判が良いからです」

ハクアの言う通り、俺の作っている薬は市販の一味違うようになっている。

具体的にはポーションを原液のまま飲めたり、異常を回復するついでに体力も回復したりする効果が付いている。

それで市場価格と値段は同じなのだから皆は当然こちらを選ぶだろう。

が、それだけではない。

ここまで繁盛するのは売り子であるハクアとアロウの人気によるものが大きかった。

「アロウ、ありがとな」

俺がアロウにそう感謝すると。

「ふん、衣食住を提供してもらっているんだ。これぐらいやるのは当然」

アロウはシヨコラに説教を受けた翌日、ハクアに連れ添われながら食堂に姿を現して昨夜の非礼を詫び、売り子をさせて欲しいと申し出た。

「シヨコラ姉ちゃんに弓の使い方を教えてもらっているのもあるし」

あれからアロウはシヨコラから弓の扱いについてレクチャーを受けていた。シヨコラは剣どころか弓の扱いにも長けていたので、毎日夜遅くまでアロウと訓練をしている。

ちなみにアロウはハクアとシヨコラに頭が上がらない状態らしい。

まあ、ハクアには弱い所を見られたし、シヨコラはいわずもがな。

仕方がないかな。

「何にせよ、良かったよ」

紆余曲折があつたが、満足できる形に収まつた。

ひとまず成功と言ってもいいんじゃないだろうか。

俺はそんなことを考えながら、客に対応している2人に暖かい視線を送った。

「……また来てます」

ハクアの怯えた様子に俺は気が滅入り、アロウは憤慨する。

二頭馬車に乗って現れたのは20代半ばかと思われる男だ。

その男の名はメダンスⅡGⅡグロバーで、ミドルネームがある通

り貴族階級の者である。

が、俺を含む全員が奴を貴族と認めず、単なるドラ息子と見ている。

そのデップリとした太鼓腹に三段顎、豚のような小さな目はまるでオークを彷彿させるような醜悪な体型だった。

そしてシヨコラの厳しい視線を向けられていることに気付いていないのか、メダンスは真っ直ぐにハクアの元へ向かって。

「ハクアちゃん、今日も来たよ。いやあ本当に君は綺麗だねえ。そんな君がこんな薄汚い道具屋で働くななんて世界の損失だ、本当に君の雇い主は見る目の無い無能な屑なんだな。どうだいハクアちゃん？ 僕の所へ来ないかい、来てくれたら綺麗な洋服や美味しい食べ物など今よりずっと良い生活をさせてあげられるよ？」

本人の目の前で悪口を叩くという見た目に反しない素敵な性格をしている。

「ええと、ごめんなさい。私の主人はもう決まっています」

ハクアはそう言って自分の首輪に付いているドッグタグを見せるのだが。

「そんなのは無効だ。そのドッグタグに記されるべき名前は僕なんだ」

そう手を上げて大仰に首を竦める様は本当に腹が立つ。

隣にいたアロウが堪らず身を乗り出してメダンスに掴みかかる
としたので、その前に俺が口を開いた。

「お客様、そろそろ後ろがつつかえていきますので早くご注文をお願い
します」

俺は努めて平静にそう忠告するのだが、メダンスは従うどころか
俺に掴みかかる。

「おい、お前はいつになればハクアちゃんを売ってくれるんだ？」

その前回と同じ言葉に俺は内心溜め息を吐きながら。

「ハクアは売り物ではありません」

と、前回と同じ言葉を繰り返した。

「聞くところによるとお前はハクアちゃんを白金貨1枚弱で買った
らしいな。よし、僕はその倍を出す。だから売ってくれ」

「何百枚積まれようとハクアを渡すことはありません」

もちろんその言葉で納得するメダンスではない。彼は肩を怒らせ
ながら。

「何い！ 僕に逆らうと言うのか！ 僕の家がどんなに凄いのか分
かっているんだろうな？」

今度は家の威光を傘に着て脅しか。

全く、本当にこいつを相手にするのは疲れる。

だから俺はシヨコラにこのドラ息子を連れ出せと合図を送った。

「あゝら、いけないわねえ」

シヨコラがメダンスの襟首を掴む前に後ろの方から甲高い声音が辺りに響く。

「ウフフフ。先程から見物させてもらっていたけど、自分以外の力を借りるのは卑怯でなくて？」

分類上は女に入るだろう。

が、それは明らかに人間ではない。

2mはありそうな長身から垂れ下がる白髪に、病的なほど青白い肌と真っ青な唇。全身を覆うローブはけばけばしい極彩色に彩られ、そしてその女からかなり離れているのに香水の匂いがプンプンと漂ってきた。

「……ベルフェゴール」

「シヨコラ、知りあいか？」

俺の問いにシヨコラは首を振って。

「初対面です」

と、バッサリ切って捨てた。

「あーら、シヨコラ、先程街で会ったのにもう忘れたわけ？ お姉さん悲しいわあ」

シヨコラの憎しげな呟きにベルフェゴールはヨヨヨとばかりに異常に長い指先を持つ手で顔を覆う。

「い、いきなり何だお前は？ 僕の邪魔をするのだったらただじゃおかないぞ！」

ここで会話から置き去りにされていたメダンスが抗議を上げた。

それにベルフェゴールはクスクスと笑いながら。

「そうねえ、邪魔をするというよりマナーというのを教えに来たのよ。確かにハクアちゃんやアロウちゃんを愛するのは私も賛成よ。けど、それにはルールがある。全員が平等に愛でさせるために節度は守らなきゃいけないし、何より独占なんて以ての外だわ。この宝石の様な2人は誰のものにもならないことが一番の理想なのよ」

ウツトリと己の体を抱き締めながら恍惚気にそうのたまうベルフェゴール。両腕が背中交わる光景なんて始めて見たぞ。

「う、嫌い！ 僕は貴族だ。貴族の言うことがルールなんだ！」

反論できただけ大したものだろう。

客を含め全員が突然現れたこの奇妙な女に吞まれてしまっているのだから。

「うーん、これは少々お仕置きなようねえ」

「ひっ！」

その蛇を連想させる笑みを浮かべたのだから、メダンスが怯えた理由も理解できる。

「いいかしら、これから私の言うことを復唱しなさい」

ベルフェゴールが怪しい光を浮かべながらメダンスにそう問うと、始めは震えていたメダンスの体が徐々に弛緩し、ベルフェゴールの言葉を繰り返した。

「あなたはこれから貴族の地位を捨てて大陸を旅する」

「僕はこれから貴族の地位を捨てて大陸を旅する」

「はい、オーケー」

ベルフェゴールが指をパチンと鳴らすとメダンスは瞳に光を取り戻し、何も言うことなく店から出ていった。

「……お前は何者だ？」

警戒心を持っていた奴に対しても簡単に後催眠を掛けたベルフェゴールに聞くのだが。

「彼女は魔族です」

隣にいるシヨコラが代わりに答える。

「魔族？　つまりは……」

「ウフフ、そうよ。私は神人に属する種族、全てを惑わす魔族の柱――ベルフェゴール」サキュトレスよ」

突然現れた奇妙な様子の女はそうあっけらかんと言いつつ放った。

場所は食堂。

魔族が何を食べるのか分からなかったがベルフェゴール曰く、何でも食べるから好きにして良いらしい。

「どうしても用意したいのであれば小さな子どもの心臓が良いわ。出切れれば獲れたての」

……その言葉を聞いて俺は普段通りの食事を出したことは言うまでもない。

「それで、魔族が何の用だ？」

まずはそう切り出すと、ベルフェゴールはスパゲッティをフォークに巻きつけながら。

「興味ね。あの『銀狼』を飼い慣らせた者がどんな人だったのか知リたかったから」

ここでシヨコラがピクリと動く。

「驚いたわよ、街を歩いていると『銀狼』がメイド服を着て首輪を付けている光景に出くわしたんだから。おかげで目を付けていた子供を見失っちゃった」

「シヨコラはそんなに凄い奴なのか？」

「何言ってるの。凄いというレベルじゃないわよ、何せ——」

「……そこまでして下さい」

シヨコラが普段とは違うゾツとする声音でそう言い放つ。

「あら残念」

ベルフェゴールは肩を竦ませるだけで終わらせるが、こつちとしてはシヨコラの殺気を受けてなおそんな態度を取れることに感嘆していた。見る、アロウも歯をカチカチと震わせているぞ。

「で、シヨコラの雇い主である俺を見た感想はどうだ？」

「ふうむ……そうねえ。あなたはただの人間とは違うわ。それは能力とか思想とかじゃない。何かこつ、別の世界からやってきた異郷人という方が正しいわね」

「お見事……」

僅かな間でそこまで見通したベルフェゴールに俺はそう称賛する。

「もう用は済んだのでしよう」

シヨコラがピシヤリと言い切る。

「今日の一晚ぐらいは泊めてあげるから、明日の朝にはサッサと出て行つて」

「あら、つれないわねえ」

ベルフェゴールは演技がかった様子でそう呟く。

「けど、残念だけど私はしばらくここに滞在するわ」

「は？ 何で？」

突然の滞在宣言に俺は食べていたものを吐き出してしまう。

「ここ数日店の様子を確認していたけど、あなた達は性質の悪い客を上手く追いつ返せていないわね。あの処理を上手くしなきゃどんどん回転率が悪くなるわよ」

「本当か？ ベルフェゴールの様な存在がいれば大問題になると思うのだが」

それにベルフェゴールは唇の頬を歪ませて。

「私の得意魔法は幻術。これを使えば己を目立たなくするくらい簡単よ」

その言葉と同時に、ベルフェゴールが座っていた場所に5歳ぐらいの子供が現れたと思った瞬間次には40ぐらいのマツチヨが出現

し、最後には俺と全く瓜二つの容姿をした青年がニヤリと顔を歪める。

「私達魔族はこうして化けて人の世に溶け込んで過ごしてきたのよ」

元の奇抜な容姿に戻ったベルフェゴールは続けて。

「これを上手く使えば迷惑を掛けるお客さんを早々退場させることが出来るようになるわ」

神人の一種である魔族のベルフェゴールが仲間に入ることほど心強い物はない、が。

「そこまでの理由は何だ？」

立場も力量も向こうの方が上。

何百年も生きる魔族がどうして一介の道具屋の厄介へなるのか分からなかった。

「何度も言ったように、1つはシヨコラの主であるあなたへの純粋な興味」

「……っ！」

シヨコラが射抜く様な視線を向けるのだが、ベルフェゴールには全く堪えた様子が無い。

「2つ目は身を隠せる場所を探していたこと。ちょっとやり過ぎちゃってしばらく大人しくしとかなきゃらないのよね」

「それは自業自得ね」

シヨコラが慄然とした様子で鼻息を荒くするのだが。

「まあ、たまにはこんなこともあるわよ」

いったいベルフェゴールが何をしでかしたのか興味を持ったのだが、聞くと必ず後悔すると本能が訴えていたので、俺は口を噤む。

「そして、最後の3つ目がこの可憐な少年少女を守るため！ ああ、アロウとハクアを見ているとお姉さん何かがムラムラしてくるわ」

「ひっ！」

「……怖い」

ベルフェゴールの大仰な台詞にアロウは震え、ハクアは縮こまった。

「おい、2人が怖がっているから冗談は止めろ」

「あら？ 私がいつ冗談を言ったかしら？」

「……」

素でそんなことを言う様子なので、心の底からそう言っているのだろう。

俺は頭が痛くなる。

「えーと……多数決を取る。ベルフェゴールを雇うことに賛成な者は右手を、反対な者は左手をそれぞれ挙げてくれ」

仕方ないので皆の意見を聞くことにした。

で、結果は。

「はい。右手0、左手3、よってベルフェゴールは……あれ？」

俺が目を凝らすのだが、皆は右手を挙げている。

おかしい、先程まで全員が左手を挙げていたはずなのに。

「あらあら、これは賛成多数で私を雇ってくれるということね」

当ベルフェゴールが能天気な様子から、俺はこいつが何かをしたと踏んだ。

「おい、お前は一体何をした？」

「大したことはしていないわよ。ただ、ちょっと皆の耳を操作しただけ」

どうやらベルフェゴールは賛成なら左手を、反対なら右手を挙げるよう幻術を掛けたりしい。

「諦めた方が良くわよ。神人である私が決めたことはあなた達人間や亜人に逆らうことはできない」

確かにその通りだと納得する。

下手に逆らってもあのバカ貴族にかけた後催眠と同じように最初からいたという風に認識させられるだけだ。

つまり、どっち道選択肢など無かったことを思い知らされる。

「……分かった。ベルフェゴール、お前を用心棒として採用する」
俺の決定に対する反応は。

「ちょ、ちよつと何でよ!？」

「おかしいだろ! 満場一致で反対したのに」

「そうです! あの多数決は何だったんですか？」

当然シヨコラ、アロウそしてハクアが俺に噛み付く。

「ウッフ、さてと、私は住む部屋でも選んできましようか。後、私は大抵の場合図書室にいるから何かあった時は呼んでね」

肝心のベルフェゴールは3人の苦情に一切関わろうとはせず、そう言い残して食堂から出て行った。

現在LUCK - 9952

物を売ると一日につきLUCKが+1となるらしい。

5話 美女と野獣

「それにしても、まさか魔族と会えるとは思わなかったな」

遊戯室で俺はキューを構えながらそう切り出す。

「あらあら、まさか私達は仙人みたいな場所にしかないと思っていたの？」

ベルフェゴールのからかいを含めた問いに俺は黙って白球を？と銘打たれたボールにシヨットする。

「……外れた。ただ、魔族よりもっとポピュラーなエルフや巨人と先に会えるのかと思っていた」

ボールは掠りもしなかったので、俺は順番をハクアに譲った。

「エルフや巨人はそれこそ秘境の奥に住んでいるわよ」

ベルフェゴールの笑い声がイヤに耳へついた。

今、俺たちがいるのは屋敷に備え付けられた遊戯室で俺とベルフェゴール、そしてハクアの3人で遊んでいた。

ちなみにシヨコラとアロウは野外で弓の訓練を行っている。

「次は私の番ですね」

回ってきた順番にハクアは気合を入れて移動させた踏み台に乗る。

「ハクアちゃん、もつとリラックスしてね。そんな調子だと男を溺れさせることはできないわよ」

ベルフェゴールがハクアの背に回って指導するのは良いが、もつと良い表現はなかったのだろうか。しかもハクアも笑顔で頷いているし。

「ベルフェゴール、あまりハクアに変なことを教え込むなよ。アロウはともかくシヨコラが嫌い」

俺は中立、そしてハクアはベルフェゴールとすぐに打ち解けたのだが、シヨコラとアロウが今でもベルフェゴールに反感を持っている。

アロウは単にハクアが余計な知識をつけることに危機感を覚えているだけなのであまり問題にしていない。

だって前にベルフェゴール仕込みの幻術によって大人になったハクアを見たアロウは目を白黒させていたからな。

その後、皆の生温かい視線に気付いたアロウはベルフェゴールやハクアに対してではなく、何故か俺に烈火の如く炎の怒りをぶつけてきたのだが、アロウよお前も内心嬉しかったのだろう。

大人版ハクアにキスされた直後のアロウの百面相は見ていて面白かったぞ。

余談だが、その際の俺に対して助ける者は皆無だったということを付随しておこう。

が、シヨコラは違う。

「お前とシヨコラは過去に何があったんだ？ シヨコラはベルフェゴールだけに対しては慇懃無礼な態度をとり続けているぞ」

シヨコラは俺が出られない代わりとして屋敷と都市を往復し、さらに屋敷の管理をするなどこの屋敷にとって必要な人物だ。面倒見がよく、性格もさっぱりしているのでアロウやハクアはもちろんのこと、来客に対しても評判がいいのだが、何故かベルフェゴールにだけは警戒心を抱いているようだった。

その問いにベルフェゴールはにんまりと唇を歪めて。

「私はシヨコラの過去を知っているからね」

と答えたので、俺は先を促したのだが。

「残念だけどシヨコラが話そうとしない以上私から話すのはマナー違反だわ。そのことについてはシヨコラ自身から聞いて頂戴」

けど、まあ。

ベルフェゴールは続けて。

「過去を完全に消すなんて不可能だし、そして人の口にも戸は立てられない。そして見たところあなたはその程度の過去でシヨコラを軽蔑したり追い出したりしないのに、必死に隠すなんて滑稽以外の何物でもないわ」

「そう思つのならシヨコラに促してやればいいじゃないか」

「いやよ、そんなことをすればたとえ善意でも私は殺されるでしょうね。これは比喻でなく真剣よ。魔族が扱う幻術というのは一般的に心が強い者には効きにくいから。殺意一色で染まったシヨコラは下手すれば神人でも敗れるわ」

「そんなに強いのか……」

「ええ、亜人の中でもシヨコラは別格よ。だからこそ素直に従わせている者がどんな人物なのか知りたかつたのよ」

普段はアロウとハクアのお姉さん役として振る舞っているシヨコラの裏にどんな過去があるのか、それを聞いてますます知りたくなつたが、今は聞いても仕方ないだろう。だから俺はこれ以上の追及を諦めた。

「やった、？ボールです」

「え！？」

「凄いわハクアちゃん」

いつの間にかハクアが残る6個の玉を全て落としていた。

ある日

夜中に叩き起こされた俺は何と表現すればいいのだろう。

確かに最初はイラツときたよ。

こんな夜遅くに一体誰が来たんだと不快な感情になったよ。

しかし、シヨコラが来て自分だけでは対処できないと述べたので、あの音に起こされてしまった全員を連れて外に出てみると、何と10m以上ある鉄条網のついた塀をガンガンと揺らしていたのだから。

「これはすごい力技ね」

シヨコラが感嘆のため息を漏らす。

そういえばシヨコラは最初ここへ来た際に、どうやって侵入したのかと問うと、単に門の近くにある道具屋が開いていたのでそこから入ったらしい。

「最初はまさか開いているとは知らなかったたので壁を登ろうとしていたけど、無理だったから諦め、駄目元で道具屋に入ると、そこから屋敷へ繋がっていたのよね」

ちなみに現在ではしっかりと施錠されていることを明記しておく。

そんなことを話している間に向こうが何やら呪文を呟くと、何と今度は塀の上から振り上げた拳が確認できてしまった。

「あゝ、あれは巨人ね」

隣のベルフェゴールが解説する。

「巨人族というのは通常でも身長が2、3mと人間に比べて大きい
のだけど、その真価は巨人族のみが使える巨大化の呪文よ。山を越
えるほどの大きさになれる巨人を私は何人か知っているわ」

のんきにそう解説してくれるのは結構だが、そろそろ壁が嫌な音
を立て始めている。

「おい！ ハクア、アロウ！ 大急ぎで堀の向こうに飛んで行って
止めさせてくれ！」

俺は空を飛べる鳥人の2人にそう命令した。

場所は会議室。

ここは屋敷の中でも最も広いので、結構人数が増えた一同が会す
のに都合が良かった。

「お疲れ様です」

俺は巨人が連れてきたもう一人の客の容体を確認した後に会議室
へ戻るとシヨコラがそう労ってくれる。

「少し遅いぞ」

「お兄ちゃん、コウイチさんを責めない方がよいよ」

俺としてはハクアとアロウの子ども組はベッドに入ってもらいた
かったのだが、そこは強固な反対にあった。

アロウは予測していたが、ハクアも口答えをするとは思わなかったな。

ハクアが口を尖らせながら文句を言う様はすごく可愛らしかったと追記しておこう。

一緒に抗議していたアロウを除く全員がハクアのむくれ顔にほっこりしていた。

「……実際にバケツを器代わりにしているのを見ると圧倒されるな」

巨人が持つそれはカップでなく、小さなバケツと形容した方が良いくらいの大きさだった。

「この屋敷の御主人殿か、夜分遅く忝い」

かたじけないとはずいぶん古風な言い方だ、江戸時代の武士を連想される。

改めて巨人を見るとやはり大きい。俺は170cm、シヨコラは160cm程度で、最も高いベルフェゴールでさえ2mだったのだが、突如現れた巨人はどう見積もっても3mは優に超えていた。

上半身しか映っていないが、胴周りはアロウとハクアがぎりぎり囲えるくらい太い。黒い髪は短く刈りこまれており、精悍な青年というのが俺の第一印象である。

「申し遅れた、拙者の名はギアウッド・ウエスタン。訳合ってルクセナールと旅をしていた」

「ギアウッドか」

俺は巨人の名を下で転がす。

「で、ギアウッドは共に連れてきたルクセンタールという名のエルフと何か関係でもあるのか？」

その問いにギアウッドは目を伏せた。

俺が先程まで看病していたのはエルフ。ウェーブ状の金色の髪に尖った耳、そしてその白い肌はまさしくエルフそのものだった。

ちなみにベルフェゴール曰く、エルフは自然を操る魔法が得意らしい。

「まあ、おおよそ見当は付いているから良い。そして、ギアウッドがここを訪ねた理由は大方ルクセンタールが突然の吐き気や目まいを訴え、どうして良いか分からなくなっただからだろ？」

「なっ！」

凶星だったのかギアウッドが目を見開く。

「安心しろ、あれは一過性のものだ。安静にして栄養を取れば問題ない。ただ……」

俺はコホンと1つ咳払いをして。

「ルクセンタールはしばらくここに滞在させるべきだな。まだ部屋

も余っているから2人とも泊まっても良いぞ」

俺の言葉にギアウッドを含めた全員が首を傾げる。

「なあコウイチ、どうしていきなり2人を泊めるといふ話になるんだ？ 風邪なら薬をいくつか分ければ良いだろ」

アロウが皆の疑問を代弁したので、俺は説明するために少し間をおいた。

「ギアウッド、今から俺の言うことを黙って聞いてほしい。そして他の皆もだ、決して騒がないでくれよ」

俺のただならぬ空気を感じ取ったのだろう。

ゴクリと唾を呑む音がどこからか聞こえた。

「ルクセンタールは……デキている」

「……はあああああ！？」

一瞬ポカンとした沈黙後、絶叫が会議室に響き渡った。

困っている人を助けた×2 +20

道具を売った日×14 +14

現在LUCK -9928

5話 美女と野獣（後書き）

ようやく主要人物を全員登場させることが出来ました。
次で第1章は最後です。

ありがとうございました。

6話 屋敷の一日（前書き）

第1章の最後ということで平和な1日を書きました。

6話 屋敷の一日

朝

誰よりも早く起きた俺は手早く身支度を済ませて厨房に立つ。

「さて、皆の分の朝食を作るか」

俺はそう呟いて気合いを入れた。

出来ることなら全員一緒に良いのだが、生憎と全員の好みが違うので、人数の数だけ違う料理を作る必要があった。

「こういう時は神様に感謝だな」

神から与えられた能力によって作りたい料理の手順が次々と頭の中に入ってくる。

だから俺はその通りに作るだけで朝食がどんどんでき上がってきた。

「おはようございます、コウイチさん」

涼やかな声音がしたので振り向いて見ると、そこには包み込むような優しい雰囲気漂わせるルクセンタールの姿があった。

「おはよう、ルクセンタールさん」

俺は首だけそちらに向けて挨拶を返す。

「出来た料理を持っていきますよ」

ルクセントールはそう手伝ってくれるのだが。

「客人にあまり仕事は手伝わせないな」

それに加えて子供持ちの身重なので辞退しようとするルクセントールは笑いながら。

「これぐらいやらないと罰が当たりますよ」

そう微笑むので俺は何も言わずに「じゃあお願いする」と頼んだ。

ルクセントールが厨房を出ていくと同時にシヨコラが入ってくる。

「おはようコウイチ」

「おはよう、ほら。これを飲んで皆を起こしてくれ」

シヨコラが皆を起こすためのスイッチを入れるには牛乳が必要だったので、予め入れておいた牛乳をシヨコラへ渡す。

「ん、ありがと。それじゃあ起こしてくるわ」

飲む前と比べて張りのある声を発したシヨコラはそう宣言すると肩を回しながらそう宣言した。

「ベルフェゴールと喧嘩するなよ、したら両方とも朝食抜きだからな」

その背に俺はそう言い放つことも忘れない。

そして全員が揃ったところで朝食が始まる。

ハクアとアロウは朝から元気一杯で美味しそうに食べてくれる。

うん、2人の様子を見てみると本当に癒されるな。作った甲斐があったというものだ。

「それに加えてこちらは」

俺がため息をついてしまう光景に目を向けると。

「……シヨコラ、私は後5分すれば起きるって言ったじゃない」

「ちゃんと5分後に起こしましたよ」

「だからって飛び蹴りはないでしょう飛び蹴りは!」

ぼさぼさ頭のベルフェゴールが澄まし顔のシヨコラに食ってかかる。

ベルフェゴールは朝が弱いので、朝食の席はいつもの飄々とした様子でなく不機嫌丸出しである。

そのためシヨコラとの関係が普段と逆転している。

今のところシヨコラは軽くないなしているから問題ないものの、もしシヨコラが喧嘩を買えば大変なことになってしまうので、毎日戦々恐々としてしまう一幕であった。

「本当に賑やかな朝餉でござるな」

ギアウッドが感慨深げにそう呟いた言葉が今の状況を的確に表していた。

昼

朝食を食べ終えた俺達は後片付けをルクセンタールに任じ、道具屋を開く準備をする。

「何で毎回こんな服を」

アロウがぶつくさ言うのは、人間と相對する時には必ず装着しなくてはならない執事服とドッグタグについてだ。

「仕方ないよ、これもお仕事だと思って」

ハクアがそうフォローしてくれるのが救い。

何せ公共の場でそれを付けていなければ、所有者なしとみなされて連れ去られても文句が言えないからだ。

しかし……

「ベルフェゴールがちょっと頑張ってくれば2人にそんな格好をさせなくても良いんだけどな」

俺は2人に聞こえないようそう話しかけると。

「何言ってるの？ アロウちゃんの執事姿とハクアちゃんのメイド姿をこの眼で見れないなんて、それは世界の終りよ！」

大真面目にそう言い切るベルフェゴールの様子から今のところその予定はない。

「ハクアはともかくアロウには絶対言うなよ、それを」

ハクアは現在の状況を楽しんでいる節が見えるが、アロウは全身から嫌悪を発しているので、心配になったが。

「アロウちゃんも大丈夫よ。ハクアちゃんのあの姿を見て一番喜んでいるのはアロウちゃんだから」

魔族のベルフェゴールが言うことなのだから本当なのだろう。

アロウの隠された性癖を知った俺はどんな返事を返せば良いのか分からなかった。

「3人が道具屋で販売している内にシヨコラはどこを掃除する？」

「そうねえ……今日は2階の廊下といくつかの部屋を片付けようかしら」

「分かった、銀製の品や絨毯を洗う際に必要な事項と用品はすぐに書くから、それに従ってくれ」

「私も一緒にお手伝いします」

シヨコラとルクセンタールはこの間に各部屋の掃除を行う。

この屋敷は広すぎるので一日で出来るわけもなく、結果として毎日掃除をすることになっている。

いやあ、もう少し小さな屋敷でも良かったのではないかと思う瞬間だ。

そして俺は残されたギアウッドに向かって。

「これが補充しなければならぬ素材のリストと、明後日の分の食料分。6時までに帰ってくると嬉しい。はい、これがお弁当」

「承知した」

ギアウッドはシヨコラが行っていた買い出しの代わりを充てさせた。

ギアウッドは巨人族なので力も大きく、シヨコラでは持ち切れなかった荷物も持てるので早急に必要な品以外を任せていた。

ギアウッドが来た頃はちょうど店も評判になり始めていた頃であり、シヨコラを1日に2回行かせようかどうか迷っていた時期なのでちょうど良かった。

ちなみにシヨコラの空いた時間はルクセントールと共に全員の昼食の準備をしている。

「さて、俺は明日の分の薬でも作っておくか」

調査室に入った俺は在庫の様子から作る物を決めて材料を手にとった。

お昼は全員が暇になることが滅多にないので、各自配られた弁当を食すことになる。

ちなみにベルフェゴールはアロウとハクアの2人が何かを食べる光景を見ることが至福の喜びらしく、2人が疲れる様子を見せ始めると独断でおやつまたは休憩を与えていた。

……おかげで一時的に能率が落ちるのだが俺は何も言わない。

ベルフェゴールの細かなケアのおかげで店の回転がスムーズになり、その分の穴を埋めるほど売り上げを果たしているし。

ギアウッドが帰ってくる頃になると客足も鈍ってきたので店を閉める。

「あゝ、疲れた」

「仕事が終わると少しホッしますね」

アロウが肩を回しながらばやく横でハクアは一息を吐く。

そして子供達はここから自由時間であり、2人は夕飯の間まで遊戯室で遊んだり昨日学んだ事柄を復習したりすることになる。

で、俺達はというとここから本番だったりする。

ルクセントールが今日売り上げた薬の集計を行う傍らでシヨコラが店内の掃除。ギアウツドは買ってきた素材や食料をリストにして、俺はベルフェゴールと客のニーズについて相談していた。

そして相談の結果、今のところはこのままで十分ということが分かった。

夕飯は俺とシヨコラ、ルクセントールの3人がかりで行うことになる。

俺はベルフェゴールの分を、シヨコラはアロウとハクアの分を、そしてルクセントールはギアウツドの分を作ることになっていた。

ベルフェゴールは最近食事に関して五月蠅く文句を言ってくるので俺が担当することになる。

アロウとハクアの2人分を作るのは大変だが、ハクアは果物を与えれば良いので実質アロウの栄養バランスだけを考えれば良いのでシヨコラ担当。

ギアウツドは長年連れ添ってきたルクセントールが決めるのが良いということ満場一致と決まっていた。

そして夕食後、特にアロウとハクアの2人は訓練の時間になる。

アロウにはシヨコラとギアウツドの2人が付いて弓を含めた戦闘全般を習い。

ハクアはベルフェゴールとルクセントール2人による魔法を主に習う。

2人とも伸び代があるのかスポンジのようにスクスクと吸収しているのはシヨコラの談。

そして俺は朝が早いので最も早くベッドに入ることとなる。

次にアロウとハクアの子ども組が就寝に入るらしい。

ベルフェゴールとルクセントールは図書室で雑談を交わし、ギアウツドは庭の手入れを行う。

そしてシヨコラが最後の戸締りを行ってこの屋敷は完全に静まり返ることになった。

現在LUCK - 9921

6話 屋敷の一日（後書き）

次回から物語が動き出しますので、新展開になるかもしれません。
寛大な心でお許しください。

1話 事業拡大

俺の目の前にはアロウとハクアが作成した地図がある。

俺はギアウッドとベルフェゴールの3人で屋敷の周辺の開墾を計画していた。

道具屋も軌道に乗り、お金が余ってきたのでここで1つ投資を試みようというのが発端である。

まずは屋敷周辺の土地を丸ごと買い上げることからスタート。

俺としてはよそ者の俺が土地を買い上げることなど不可能で、仮に成功しても結構ふんだくられるかなと予想していたのだが、それは杞憂に終わる。

1つ目の理由として、ここら周辺は森林が生い茂り、魔物が出現する未開の地なので重要な場所と見られなかったこと。

そして2つ目がベルフェゴールによる意識操作によって足元を見られることなく適正価格で購入できたこと。

「適正価格にするくらいならただで譲ってくれるよう操作すれば良いじゃない」

と文句を言うのはシヨコラだが、ベルフェゴール曰く周りに与える違和感は少ない方が後々面倒事が起こらなくて済むとのこと。

それなら先日に行ったボンボンに対する仕打ちはどうなのかと聞

くと、彼の両親は息子が旅に出ると聞き泣いて喜んだらしい……一体あいつはどれだけ家にたかっていたんだか。

シヨコラは街へ開墾のための人手を募集しに出かけているので、代わりにルクセントールが屋敷の掃除を1人で任されていた。

「とりあえず宿屋と酒場は欲しいよな」

まず何を建てるのかと問われれば俺はまずそれを提案する。

冒険者がここを拠点として魔物を狩るとすれば宿屋は必須だし、さらにそれに加えて酒場も欲しい所。他にも武器防具屋や農地や畑を作るにしてもまずは安定した収入が欲しかった。

「そのための人手はどうするの？ 言っておくけど金はあると言っても道具屋で稼いだお金はたかが知れているわ。人件費は勿論のこゝと建物を建てるのに必要な材料費や彼らの寝床や食費を計算に入れると、とてもじゃないけど今あるお金では賄い切れない」

財政担当のベルフェゴールがそう意見する。

確かにこんな辺境に建物を建てようとするれば、材料の移送費や人件費が相当掛かるだろう。

が、俺はあっけらかんと言。

「何も一から建てようというわけじゃない。すでに建っている建築物をここに持ってこようと考えている」

「何言ってるのよ、確かに街に行けば誰も住んでいない廃屋なんて

腐るほどあるわ。けど、それをどうやって運ぶ――」

と、ここでベルフェゴールはギアウツドの存在に気付いたようだ。

しばし呆然としたベルフェゴールは首を振って思考を取りまとめた後続けて・

「確かに巨人族のギアウツドがいれば家の一軒や二軒など持ち上げることが出来るかもしれないわ。けど、それから先はどうするの？ 巨大化の魔法はそんなに長続きしないのよ」

「それについても考えてある」

俺はそう言つて1枚の計画書をベルフェゴールに渡す。

「丸太で編んだ板に家一軒乗せ、さらにその下に丸太を敷いてを引っ張つてこようかと考えている」

エジプトでは切り出した岩の下に丸太を敷き詰めてピラミッドまで運んでいたという。

今回は岩でなく家だが基本的なことは同じだろう。

「この方法なら建物を作る必要が無く、中を改装するだけで使えるようになる。こちらとしては作業時間も短縮でき、さらに従業員の教育も最小限で済ませられるので一石二鳥だな」

まあ、これは巨人族のギアウツドがいるからこそ出来る計画だけだな。と、独白していると、ベルフェゴールは狂ったように高笑いを始めた。

燻しげな視線でベルフェゴールを見つめる俺。

「面白い、本当にあなたは面白いわ。シヨコラがあなたを認めるわけね、久しぶりに頭のねじが2、3本ぶっ飛んだ人間に出会えたわ」

「失礼なことを、俺は至って正常だぞ」

俺はそう抗議するも、隣のギアウッドさえベルフェゴールに同調する。

「拙者もベルフェゴール殿と同意見である。まさか拙者をそのように使うとは思いませんでしたぞ」

2対1で俺は変人というレッテルを貼られてしまった。

「……まあ、とにかく」

俺はこの悪い空気を払拭するために咳払いを一つ。

「ギアウッドは周辺の木々を切り倒して土地の確保兼材料の確保。ベルフェゴールはシヨコラが連れてきた人材に催眠をかけてシヨコラの言うことを頭に入り易くしてくれ」

その言葉に2人は頷く。

「ここにいないシヨコラは連れてきた人材の教育で、ルクセセンターはシヨコラが忙しい分屋敷の管理。そしてアロウとハクアはいつもと変わらない、これでいく」

2人から異論が出なかったので俺はその方針でいくことに決定した。

シヨコラは人間が嫌いだからおそらく人間の比率は少ないだろうと予想していたが、さすがにこれは無いだろう。

「……おいシヨコラ。全員が亜人とはどういうことだ？」

「使える人材を選別した結果、こうなっただけよ」

シヨコラは澄まし顔でそう述べるが、それは確実に嘘だろう。

目の前にいるのは亜人が50人ほど。

が、内容は悲惨そのものであり小さな子供や年老いた老人の比率が高く、中には年若い者もいるにはいるが、肌のやつれ具合から若い者全員が病気や怪我によって捨てられた者だろう。

簡単に言うと全員訳あり。

まともな人材など1人もいなかった。

「安心して、犯罪者はいないから」

俺の様子からさすがのシヨコラも額に汗をかいてそう言い含めるが、それが焼け石に水だということがシヨコラ自身分かっているのだろう、さらに続けて。

「街の貧民通りにはそこら中に彼らが打ち捨てられているのよ。あなたに分かる？　彼らが何の希望もなくただ死を待つ光景というのは心に来るものがあるのよ」

身ぶり手ぶりで必死に説得するシヨコラ。

そういえばシヨコラは人身売買に限っては後先考えずに買う悪癖があつたな。

アロウとハクアがどうしてこの屋敷に来たのかその原因を今まで忘れていた。いや、忘れようとしていたの方が正しいか。

「はあ……」

俺は頭を抱えながらこれから先どうするのかを練る。

不幸中の幸いというべきか、若い者は俺の知識による治療を施してやれば元通りに復活するだろう。その後にギアウッドの手伝いや開墾を任せれば良い。

子供に関しては少々酷だが、ベルフェゴールの洗脳を利用して即戦力に仕立て上げるか。そして才能のある子がいれば、その子に薬や鍛冶でも伝授しよう。

そして老人に至っては若い者や子供の監督を任すしかないな。老人は体が動かない代わりに経験が豊富なのできつと彼らの良き世話や指導相手になってくれるだろう。

そして……

俺はジロリとシヨコラに鋭い視線を投げかける。

「な、何かしら？」

シヨコラの尻尾がピンと伸びている様子から内心はかなり動揺している。

「お前、しばらく甘い物お預け」

シヨコラの絶叫が辺りに響き渡った。

困っている人を助けた	× 50	+ 500
道具を売った日	× 30	+ 30

現在LUCK - 9391

1話 事業拡大（後書き）

LUC K計算の考察は次回掲載予定です。

2話 嵐の前触れ（前書き）

起承転結で言うと承の部分でしょうか

2話 嵐の前触れ

「ふむ……」

俺はLUCK変動について考察する。

「人助けをすると+10、そして物を売ると何を売ったかによらず1日+1か」

そこまでが先月にまで分かっていたこと。

しかし、今回から人を雇ったことにより新たな要素が入った。

『仕事を与えた LUCK+10』

これは人数に関係なく、1日に+10だけ増える仕組みとなっている。

また。

『人を助けた LUCK+1』

先日屋敷に訪れた人が転びそうになったので、慌てて支えると上記の様なメッセージが出現した。

そしてこちらは人数分だけLUCKが増えている。

これらの要素から考えられることは。

「人だけに利があると人数次第でLUCKが上がり、そして自分にも利があると曰ごとにLUCKが上がるのか」

人数によってLUCKが変動する場合には、相手の一方的な利のみである。相手を助けたことによってこちらはその分労力を使っている。

そして1日1回LUCKが変動する場合はこちらにも利がある。物を売ることによって自分は利益を得、さらに人を雇うことによって自分は事業を効率よく進めることが出来た。

LUCKが1しか上がらないのは誰にでもできることを行い、LUCKが10も上がるのは自分に余裕が無いとできないことをすることが条件。

「今のところ分かっているのはそれぐらいか」

もしかすると他のもつと他の条件があるのかもしれないが、現在分かっていることから判断するところなる。

「とにかく、善行を積みばいいんだよな」

確実に分かっている事実を呟いた俺は次へと移る。

皆は現在進行形で作られている街の名を何と名付けようか皆で話し合ったことがあった。

そして決まった名がコルギドール。

皆は街の名前が決まって嬉しそだったな。

が、俺は皆と違って若干冷めていた。

その理由は、屋敷の周辺に宿屋や酒場の他にも畑や農場などが建てられているのを目で見て確認することが出来るのだが、残念ながら俺は不可能だからだ。

「俺はこの屋敷の外の景色を見ることが出来ないのだから当然か」

ハクアとアロウの力を借りて塀の上に立とうとしたのだがそれもダメらしく、急に突風が吹いてきて危うく怪我しかけた。

「まあ、そこは俺の業として我慢するしかないな」

この状況に苛立って愚の決断を行おうものなら俺がここから出ることは永劫ないだろう。

俺は皆と違ってここから出られない。

環境が悪くなったからと言って場所を変えることはできないのだ。

「幸いにも俺の判断が上手くいっているかどうか確認するのに最適な目安があるし」

俺は頭上で点滅しているLUCKの文字がある。

それに加えて屋敷の住人の態度からおおよその判断が出来るだけまだましか。

「何にせよ、楽しみは最後まで取っておくか」

LUCKが正常値に戻り、俺がこの屋敷の外に出た時の感動のため
の我慢だと考えれば多少気が楽になった。

「〜」

「シヨコラは本当に現金だな」

呆れ返る俺をよそにシヨコラは久しぶりに食べることできたパ
フェを存分に頬張る。

「いえ、だってあんたの作るパフェの味を知っちゃったら他のじゃ
満足できないし」

神様から与えられた能力のおかげだと知っていても褒められるの
は嬉しいものだと思感する瞬間だった。

「それにしても、上手く行って良かった」

食堂のテーブルに肘をつきながら俺はそう零す。

シヨコラが連れてきたお荷物——じゃない人物は本当に癖のある
人材ばかりで、適材適所に割り当ててるのに苦労した。

全く自慢にならないが、もしベルフェゴールの催眠&洗脳が無け
れば2、3回は反乱を起こされていた自信がある。

何せあいつらは俺達——特に人間である俺のことを全く信用しな

いし。

食料でも何でも隙あらば盗もうとする輩、特に子供が後を絶たなかったため同年代のアロウとハクアには彼らの指導役として大きな迷惑を掛けてしまった。

多分俺はしばらくあの2人に頭は上がらないと思う。

後、余談だが子供達を連れてきて以降アロウとハクアに劇的な変化が現れた。

まずハクア。

亜人から見てもハクアは相当美しらしく、異性はおろか、同性からも告白された回数は数知れず、独占欲に刺激された何人かはハクアを連れ去ろうと計画していたほどらしい。

本当にハクアに師匠を付けておいて良かった。訓練されてもいない彼らなど相手にすらならなかったと聞いている。

そしてそのハクアを守ろうと一層アロウも努力に努力を重ねている。

前々から頑張っていたものの、自分の他にハクアを狙う者が現れたとして自尊心に火が付いたらしい。まあ、シヨコラとギアウッドが付いているから壊れるまでやることはないだろう。

「何というか……ハクアは魔性の女だな」

その容姿と仕草で男を狂わすそれはベルフェゴールによって開花

してしまった印象がある。

しかもまだ9歳。

将来が未恐ろしく感じてしまう。

「あらあら、逢引きかしら」

そんな楽しむ様な声音で聞いてくるのはその元凶であるベルフェゴール。

彼女も仕事に一段落が付いたらしい。

「さあ、どうだろうな」

俺が黙っているとシヨコラが何か言い出して論争に終わりが無くなるので、先手を打つ。

案の定シヨコラは何か言いたそうだったが、話のタイミングを逃してしまって悔しそうに黙りこんだ。

「この周辺を街化する計画は順調そうね」

ベルフェゴールの呟きに俺は頷く。

「後から若い者が入ってきたのが大きいな」

最初はかなり苦労したのだが、亜人の中でも弱者の立場にある子供や老人、怪我人などを俺は見捨てないという風聞が広まり、それに感銘を受けた若い者が俺の屋敷を訪れて働きたいと願う者が後を

絶たなくなった。

おかげで屋敷の周辺には活気が生まれ経済や人の流れが活性化し、また活気が生まれるという好循環が発生して俺の計画は思った通りに進んだ。

……が、ここで困ったことが起こった。

「コルギドールに住んでいる者は全員亜人なんだよな」

旅人や冒険者を除くと人間は俺一人だけである。

本来ならあまり好ましくないのだが、人間を屋敷の周辺に住まわせるのと亜人達の人権が侵害されるのでやむを得ず取った措置である。

「そろそろ周辺の都市——ウェスパニアからの催促が煩くなってきたし、どうするべきか」

今のところは催促しにきた人間に対してベルフェゴールの幻術を掛けることによって事なきを終えているが、それもいつまで続くか分らない。魔族による幻術は確かに強力だが、掛ける人数や洗脳する時間が増えるとそれも薄れてくる。

このままだと遠くない未来に軍隊を差し向けられる可能性もあった。

「お疲れ様です」

「失礼する」

俺が今後の方針について頭を悩ましていると、タイミング良くクセントールとギアウッドが食堂へと入ってきた。

「コウイチさん、どうかしましたか？」

俺が難しい顔をしていることに気付いたルクセントールが話しかけてくる。

「まあ、ちよつとな……」

本当なら2人にも相談に乗って貰いたいのだが、これは俺の問題のため適当に言葉を濁すことにしたのだが。

「コウイチ殿よ、そんなに思い詰める必要はない。拙者らは仲間だ、悩みは全員で共通するべきでござろう」

ギアウッドが嬉しいことを言ってくれたから俺は思わず唇を緩める。

「そうか、なら——」

「ふーん、なるほどねえ。ウェスパニアの人間が煩くなってきたと」

俺の悩みの種を聞いたベルフェゴールがそう呟く。

「全く、人間は自分の思い通りにならないとすぐ武力に訴えるんだから」

シヨコラがそう文句を言うのはいつも通りだとして。

「この世界の常識を考えると人間を住まわせるわけにはいかないんだよなあ」

亜人の人権などあってないようなもので、万が一喧嘩になった場合、罰せられるのはこっちだ。そして俺が雇い主という立場で文句を言おうとも、向こうがやっていないと言い張れば周りの亜人がどれだけ異を唱えても採用されない。

あくまで同じ人間が証明しないと駄目なのだ。

「私の幻術もこれ以上は難しいし」

ベルフェゴールの言葉通り、やりすぎると後で手痛いしっぺ返しを食らってしまう。

だから恒久的に幻術を頼るわけにはいかなかった。

「ふむ……それなら拙者とルクセンタールの2人が直談判しようか？」

「私達神人なら人間も多少聞く耳を持つだろうし」

それまで黙っていたギアウッドとルクセンタールがそう意見を出す。

「そうなのか？」

人間が神人に対して畏怖を持っているというのは初耳なので俺は聞き返すと。

「その通りよ。あの人間どもは神人を敬う傍ら私達を下に見ているのよ」

つまり神人はどう足掻いても敵わないから、その劣等感を隠すために亜人を虐げると。自分より下の者の存在がいる事実によって安心するのはどこの世界でも一緒か。

変わらない人間の醜さに俺はため息を吐いた。

「でも、まあ」

ベルフェゴールがこの重苦しい雰囲気跳ね飛ばそうと殊更明るい声を出して。

「エルフや巨人が人間と交渉するのはそう悪い考えじゃないわ。少なくともシヨコラやコウイチが相手にするよりずっと良い」

「お前もそうなのか？」

俺の問いにベルフェゴールは手をヒラヒラと振りながら。

「私達魔族は人間に警戒されているのよ。間違っても正面から会おうとしないでしょうね」

幻術を掛けて人を惑わす魔族は人間に警戒されているのだろう。

しかし、それでも討伐されないのは、魔族の高い狡猾性ゆえかそれとも報復が怖いのか。

「それならギアウッドとルクセントールの2人にウエスパニアの実

力者と交渉してもらおうかな」

俺の要望に2人は1も2もなく頷いた。

俺は懸案事項の1つに目処が立ったので椅子に深く腰掛けた瞬間。

「やっと休憩。コウイチさんのお菓子が食べたいな」

「ハクア、はしたないぞ」

ハクアとアロウがその言葉と共に入ってきた。

「分かっているわよ2人とも、とっておきを持ってくるわ」

ベルフェゴールがルンルスステップを踏みながら氷の入った密閉倉庫からホールケーキを取り出す。

純白の生クリームの上に旬の季節のフルーツが乗ったそれは売り物としても十分通用する外観だったし、もちろん中身も期待を裏切らない味である。

俺は3時ぐらいになるとこついう風に日替わりのお菓子を作って置いている。

今回の様に全員が揃うことなど希だが、それでも皆の評判は結構好評だった。

「じゃあ私が切るわ」

パフェを食べ終わったシヨコラがいつの間にかナイフを用意して

いる。

「おいシヨコラ、お前はさっき食ったばかりだろう」

俺は空になったパフェの容器を指差すのだが。

「甘い物は別腹よ」

の一言で押し切られてしまう。

だからと言って認めるとハクアとアロウに示しがつかないので俺は口を開いたのだが。

「コウイチさん、私達のことはお構いなく」

「そつだよ、シヨコラ姉ちゃんが甘い物に目が無いのは俺達も知っているから」

年少者の2人にそう諭されて俺は口を閉じる。

「さすが2人とも、よく分かっているじゃない」

おいシヨコラ、何感慨深げに呟いているんだ？ 言っておくが今のお前は全然褒められないんだぞ。

「……まあ、良いか」

1/10に切り分けられたケーキが俺の場所に運ばれ（シヨコラとアロウそしてハクアの3人がケーキの半分を取っているため）ルクセントールが紅茶を淹れられたのを見て俺は嘆息する。

皆が楽しそうなんだ。

なら俺が口を出して場を悪くするのはおかしいだろう。

「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」

全員で手を合わせた後、俺はケーキにフォークを入れた。

2話 嵐の前触れ（後書き）

次回はシヨコラ視点からの物語です。

3話 ショコラの過去

「
」

朝、起きた私は普段着のメイド服に袖を通す。

この振り振りのエプロンやカチューシャを付けることは人間に服従した証として嫌だったけど、案外悪くない、むしろ心が躍る。

ベルフェゴールから言わせると「あなたも仕えるべき主を見つけたのね」らしいけど冗談じゃない。

私はまだコウイチを主としては認めていないわよ。

けど、あいつは人間にしては人間らしくない態度を取るし、作る料理も美味しいし何より近くにしていると安心するだけよ。

それをベルフェゴールからすれば飼い慣らされたと見えるみたい。

全く、これだから魔族は腹が立つわ。

全然本質を見ようとしなない。

さて、今日の朝もベルフェゴールに素敵な起こし方でもしてあげましょうかしら。

私は不敵な笑みを浮かべながら奴がいるであろう図書室へと向かったわ。

「こら！　しっかり働きなさい！」

私が櫛を飛ばすのは外で農作業行っている亜人達に対してよ。

全く、どうして彼らは隙を見てサボろうとするのかしら。

そんな真似なんて人間だけで十分、誇り高い亜人はそんな真似などしなくて良いのよ。

「シヨコラさん、少し厳し過ぎだと思っています」

見るに見かねたハクアがそう忠告してくれるけど、私からすれば砂糖菓子に蜂蜜を掛けるほど甘いと考えているのだけど。

「シヨコラ姉ちゃんと皆を一緒にしないでくれよ。姉ちゃんは亜人の中でも別格なんだから」

どうやら私の動きを皆に求めるのは相当酷の样ね。

仕方ない、2人に免じて今日はこれぐらいにしておきましょうか。

「さすがハクアちゃんとアロウ君だ。君達は唯一ケルベロスを抑えられる天使だよ」

何か後ろでとても不穏なさやきが聞こえた気がするけど多分気のせいよね。

「シヨコラさん、お疲れ様」

屋敷の中で一休みをしていると、いつの間にかルクセントールが私に紅茶を淹れてくれたわ。

「あら、ごめんなさい。気を使わせちゃって」

ルクセントールはそろそろ目に見えるほどお腹が出始めているわね。

この中に新しい命が芽吹いているのを知ると私も気分が暖かくなってくるわ。

「ギアウツドの調子はどうですか？」

紅茶を口に含んでいるとルクセントールがそう聞いてくる。

基本的にギアウツドは外の管理でルクセントールは中の管理だから触れ合う場面が少ないのよね。

いくらギアウツドが大丈夫だと言っても、自分は確認できないから不安なんだろう。

そしてギアウツドも頻繁にルクセントールの様子を聞いてくるわ。

全く、本当に2人には妬けるわね。

私はギアウツドの調子を詳細に伝えたと、ルクセントールは安心した様な笑みを浮かべて自分のお腹を撫でたわ。

そんなこんなで私は幸せな日々を送っていたわ。

少なくともコウイチと出会う前のささくれた生活とは無縁でいられた。

けど、私は気付いていなかった。

過去は決して消せず、いつまでも自分に付いて回るという事実を。

その日、私は普段通りサボる輩を容赦なくしごきまわっていた時、アロウから連絡がきた。

曰く、この手紙をシヨコラへと渡してほしいと。

そしてその手紙の内容には私を『銀狼』という過去の呼び名で記されていた。

そこは森の奥深くの場所だった。

まだ危険な魔物が徘徊するので未だ人の手が入っていない地。

そして手紙に書いてあった場所に1人の男が佇んでいた。

その男は私と同じ犬の亜人なのよ。

「久しぶりだな、銀狼」

「頭領……いえ、ソルト」

傷だらけの顔面に狂気の光を宿したソルトが低く静かな声音でそう呟いた。

屋敷の皆に対して私は犬の亜人と紹介しているけど本当は違う。

私の本当の種族は犬よりも強く、賢く速い狼なのよ。

少数亜人として数は少ない代わりに個人個人の力量は他の亜人を大きく引き離していた。

狼の亜人は神人に近い亜人として認識されていたね。

そのため、狼族の国の国民はわずか数千人の数しかいなかったけど、人間が治める各国から侵略も受けずに一目置かれていたわ。

そして国の政策として直営の傭兵団を組織し、それを各国に派遣してお金を稼いでいたわ。

そして私はその傭兵団の中でも精鋭にあたる『狼月団』のエースとして、そしてソルトはリーダーとして皆を率いてたのよ。

あの時はあの時で結構楽しかったわね。

言い方は悪いけれど、戦場で感じる風は私をとて興奮させるのよ。

強敵とやりあい、命を削り合うあの瞬間は何度経験しても飽きるものではないわね。

……まあ、そんな過去など皆には口が裂けても言えないけど。

が、そんな日々は急に崩れ去った。

あの亜人に対する差別が特に酷い神聖ガルザーク帝国の皇帝へと就任したダグラスの策謀によって私達の国が滅びたのよ。

ダグラスは狡猾だった。

まず帝国の周辺諸国に戦争を起こさせて私達の傭兵団を召集させる。

そして私達の食料を絶ったり、伏兵やらを仕掛けられ、最終的に帝国の仕業だと判明するまで傭兵団の5個は潰されたわね。

まさか傍観を決め込んでいた帝国がそんな真似をするはずがないという先入観も判明を遅らせていたのは否めない。

とにかく、私達は多くの戦士を失ってしまい、それに乗じて私達の国へ攻め込んできた。

慌てて各国に散らばっている傭兵を収集しようとしたけど、向こうはそれを待ち構える形で私達を迎撃したのでまんまと罠に嵌った私達は戻ることすら叶わず、『狼月団』のように散り散りになってしまった。

そして私は1人でも国へ戻ろうと急いでいたが、途中で空しく国

が滅びたことを聞かされた。

しかも狼族の国を滅ぼしたとして周辺諸国から喝采されるというオマケ付き。

その栄光の下で一体何人の同族が血に沈んでいったのか想像もつかないわね。

それで自棄になった私は復讐のために、人間を襲おうと手近な屋敷に侵入してコウイチと出会ったのよね。

私はあれ以来丸くなったけど、ソルトはそうでもなかったみたい。

むしろ憎しみや怒りなど負の感情を研ぎ澄ましたような印象を受けるわね。

「何だよその格好は」

ソルトは私の着ている服を睥睨しながらそう切り出す。

「誇り高き狼の亜人の俺達がそんな使用人風情な服を何故着ている」

「この格好の方が色々と軋轢を生まないからよ。私はコウイチの名代としての立場だから人間に接しないといけないの」

確かに私を蔑む様子の人間は今でも殺意を覚えるけど、それ以上に守りたいものがあるのよ。

ソルトは私の答えを嘲笑し。

「はっ、これは傑作だ。あの銀狼がコウイチとかいう人間に飼い慣らされるとはな」

「……コウイチを悪く言うといくらソルトでも容赦しないわよ」

我知らず目を細めるとソルトはニヤリと笑いながらゾクリと身を震わせる。

「いいねえ、銀狼は健在だったか。うん、それは良かった」

何を良かったのかは知らないけど、ソルトにとっては嬉しい出来事のようなね。

「で、何？ 私をこんな所に呼び出しておいて。これ以上御託を述べるようなら殺すわよ？」

「クックック、笑顔で殺すとか。本当に銀狼はおっかないだな。しかし、それが良い」

「……」

「少なくとも3mは離れていたはずなのだが、一瞬で距離を詰めてナイフを喉元に突き付けるか。身体能力も変わっていないな」

「お褒め頂きありがとうございます」

「とりあえず少し離れてくれないか。このままじゃ喋りにくい」

ソルトが降参とばかりに手を挙げたので、私はナイフを定位置へと戻す。

「単刀直入に言おう。銀狼、お前は俺の元へ戻れ。そして人間どもに鉄槌を下そう」

「断る」

「ほう、お前は俺達の国が滅ばされたことを忘れたのか？」

「忘れてはいないわ、今でも殺したいくらい憎い。けど、私はもう居場所を見つけた。それを捨ててまで復讐をしようとは思わない」

それが私の正直な感想。

人間が好きかと問われれば即答で首を振るしかないけど、だからと言って人間の全てが憎いわけじゃない。

ダグラスの様な糞野郎もいればコウイチの様な変な人間もいる。

だから一概に悪と決め付けるのはどうかと思う。

「交渉は決裂、私はあなたに言うことはない。それじゃあね、バイバイ」

私はもう話は終わりとばかりに手を振るのだけだ。

「——コルギドールは良い街だよな」

ソルトの言葉に私は足を止める。

「亜人の亜人による、亜人だけの街。俺が見てきた街の中でもあそこまで亜人が生き生きしている場所は他にないぜ」

「何が言いたいのか？」

「でもなあ、だからこそ人間どもは目につくのさ。どうして自分はこんなに苦しいのに、あの亜人は元氣そうに振る舞うのか。気に入らない、ここで少し立場を分かせてやろう。そんなことを考える人間がいてもおかしくはねえよなあ」

ソルトはさらに続ける。

「先日、人間どもは飼い慣らされた亜人を大量に自分達の街へ潜伏させた。人間どもはこの際街中で暴れさせて亜人による恐怖を再確認させ、そしてその亜人どもをコルギドールへ逃げ込ませることによって処罰する口実を作るようだ」

「何をそんな馬鹿なことを」

声が震える、上手く息が出来ない。最悪の光景に私は身を竦ませる。

「ほう、ならこいつに聞いてみたらどうだ？ この計画の一端を担っていた人間の口からな」

ソルトはその言葉と同時に下に敷いていた袋をこちらに投げ渡す。

その中には人間が入っており、相当怖い目に会ったのだろう。まだ若いのに髪の毛が全て真っ白だった。

「……ほ、本当だ。ウエスパニアの実力者達が、コルギドールを壊滅させる謀略を、練っている……」

「……」

そんなうわ言を繰り返す人間を横に転がして私はソルトに向き直る。

「良い目だ……」

ソルトは満足そうに頷く。

「それこそ銀狼、神人からも畏怖されたお前だ」

と、ここでソルトは指をパチンと鳴らす。

「狼族の生き残りだ。大多数が捕縛または殺されたが、それでも100人は確保している」

今まで気配を殺していたのだろう。私とソルトの周りから狼族の面々が姿を見せ始める。

「俺の計画はこうだ。この計画を行った人間どもは安全圏の場所でのほほんとしているだろう。だが、俺達はその混乱に乗じてそいつらを殺す。どうせ奴らはこの騒動をゲームを見るかのようにしか考えていないだろう。だからそいつらは犠牲者となってもらおう」

ふっん、それは面白いわね。

きつと謀略を仕掛けた輩は陰で笑っているのだから、奴らには念入りに弄ってやろうかしら。

と、ここで私は1つの疑問に気付く。

「この企みが成功し、人間どもに一泡吹かせるのは良いけどその後はどうするの？　いくら初撃が成功したといっても国——リーメンダークから正式に軍隊が派遣されればコルギドールは終わるわよ」

「つまりお前は何みせず相手の謀略に嵌ると？」

「それは……」

「何もしなければ滅び、何かしても同じように滅ぶ。それなら行動した方が良いだろう」

「コウイチは私達と違ってあそこから動けないのよ、みすみす死なせる気？」

「あいつは人間だろ？　それなら放っておいても良いじゃないか」

その言葉に私の頭は急速に冷えてくる。

先程まで自分の中で暴れ回っていた憎しみが嘘のように消えていく。

「言っておくがお前が止めた所で俺達も人間どもも動くぞ。そして俺がお前を誘ったのは、コルギドールを滅ぼす輩をせめてお前の手で殺してやった方が良く考えたからだ」

「ぐっ！」

私の思考を読み取ったかの様にソルトがそう言い放ってくる。

確かにこれは私個人でどうにもならない。どう足掻いたところでこの流れは止められないだろう。

「俺としてはお前は参加してほしい。銀狼なら奴らを守っている亜人や人間どもを蹴散らせるからな」

ソルトが差し出した手を私はそうすればいいのだろう。

その手を取るか、それとも払いのけるか。

どちらが最善なのか今の私には分からなかった。

「あらあら、物騒なお話ねえ」

と、ここで普段から私の癢に障る憎たらしい声が私の隣から響いた。

「だ、誰だ！ 貴様は！」

ソルトも突然現れたベルフェゴールに動揺したようだ。

「ベルフェゴール……」

この時ばかりはベルフェゴールに感謝するわね。

「謀略とか殺すとか透明になって聞いていたけど、好ましいお話で

はないわねえ」

ベルフェゴールは手で口を覆いながらそんなことを呟く。

「ソルトちゃんだっけ？ あなたはもう少しましな計画を考えられないの？ お姉さん聞いていて呆れちゃった」

「突然現れて何だ貴様は！ 貴様には関係のない話だ！」

ベルフェゴールの呆れ声に食ってかかるソルトに彼女（？）は一言。

「あら、これでも無関係というわけ？」

ベルフェゴールが手をパチンと鳴らすとその姿がネコの耳を生やした怪しげな老人の姿へと変化する。

「あ、あなたは！？」

私は誰なのか面識が無かったのだけど、ソルトを含めた狼族は思う所があるみたい。

「シヨコちゃん。私はソルト達狼族に住居や食べ物を提供していたのよ」

なるほど、それなら納得……って。

「私は財務を握っていたのよ。これぐらいちよろまかすことなんて簡単」

ベルフェゴールは横領をしていたみたいね。

これは後でコウイチに伝えておこうかしら。

そんなことを考えている間にベルフェゴールは元の体に戻ってその長い手を広げながら。

「ソルトちゃん、あなたもこの逃亡生活を続けるのは御免でしょう」

ちゃん付けに多少不快感を示したものの、その台詞にソルトは頷き、周りの狼族も同調する。

まあ、逃亡生活を経験した私も言えるのだけど、あれは本当にきつい。

如何に誇りや名誉は空腹や渇きの前に無力だということを思い知らされたわ。

「ショコラちゃん、あなたは彼らをコウイチの前に連れて行って頂戴」

ベルフェゴールは私にそう命令した後。

「この問題はお姉さんに任せておきなさい。人間に鉄槌を下し、かつコルギドールは存続させて見せるから」

高らかにそう宣言した。

ベルフェゴールは嫌な奴だけど、こういう荒事に関しては完璧に近い仕事を行ってくれるわ。

なので私は高笑いを続けるベルフェゴールを置いてソルト達と共にコルギドールへと向かった。

3話 ショコラの過去（後書き）

この章はベルフェゴールがキーパーソンです。
ダグラスはしばらく名前だけの登場になります。

4話 暗躍

ハーメルンの笛吹き男という逸話がある。

この内容を大まかに述べると、ネズミに困っていた街にハーメルンという笛吹きが現れてネズミを一匹残らず駆除し、また次の年に来たハーメルンは今度は子供達を連れていったという逸話だ。

これを今の状況に置き換えてみよう。

突然ウエスパニアに笛を吹くベルフェゴールが現れて街に住む亜人を一人残らず連れ去り、また次の日に現れたベルフェゴールは今度は子供達を全員コルギドールへと連れていった。

「で……その結果。コルギドールには抗議が殺到したと」

俺は目の前に積まれた抗議の山を見上げながらそんなため息を吐く。

「ベルフェゴール、いくら何でもやり過ぎではないのか？」

2人しかいない中で俺はそうベルフェゴールに愚痴る。

シヨコラから大まかな話は聞いた。

ウエスパニアに住む者が謀略を仕掛けてくるので、その先手をベルフェゴールが打つというところまでは知っていたが、ここまでやるとは予想外というのが正直な感想。

「何言っているのよ、ここまでやらないと意味がないわ」

「……確実に軍を差し向けられるぞ」

「それでも良いんじゃない？」

あっさりとベルフェゴールは言い切る。

「いきなり国は動かないでしょうから、まずはこの一帯を治める力
テナ伯爵の軍隊を差し向けるのが妥当ね」

さらに続けて。

「人間は汚れ役を亜人に押し付けているのよ。軍もそう、だから亜
人を抑えれば後の人間だけの兵隊はどうってことないわね」

「亜人さえなんとかすれば楽にこちらが勝てると」

俺が確認を取ると。

「その通り、向こうもいやいや服従している亜人が多いからちよつ
と小細工すれば一発よ」

「また幻術を使うのか？」

「うーん。それが可能ならいいんだけど、数百にも及ぶ亜人に命令
を無視させるような強力な幻術をかけるのは無理ね」

「つまり指揮官と亜人を分断させるためにちよつとした細工が必要
なわけだな」

「そうね。向こうもそれを狙ってくるのは承知の上だから、相手の予想を上回る何かを仕掛ける必要があるわね」

「それならルクセントールの出番かな。霧か何かでも起こしてもらって視界不良にでもさせてもらおうか」

向こうはそこらを収める領主なので魔法使いなどを擁していまい。少なくともルクセントールの魔法の妨害はされないだろう。

「そうなるわね。その隙にシヨコラ達狼族を人間にぶつければ終わりよ」

人間も魔法が使えるのだが、やはり本場のエルフには適わない。

どれぐらい差があるのかというと、人間がつむじ風を起こすだけの時間があるのならエルフは竜巻を召喚できる。

そのため人間は10人のベテラン魔法使いを揃えてようやくエルフ1人と対峙することができた。

「ルクセントールが戦場に出るのはこれが最後にしてほしいよな」

強いとは言ってもルクセントールは身重なわけで万全とは言い難く、下手にストレスを与えれば流産の危険性があるので、戦場に立つてほしくなかった。

「本当にね。お姉さんも良心が痛むわ」

ここで話は戦いの後に移る。

「それにしても、これで勝ったからと言って終わるわけじゃない。領主を倒せば次は国から、国を倒せば今度は周辺諸国から。国はともかく周辺諸国の連合軍を相手に勝てる気がしないのだが」

いくら質でこちらが勝っているとはいえ、量が違う。

たとえ個々が軟弱であろうが、数が膨大なればそれは立派な脅威だ。

「人間は団結してこの大陸を支配したのだろうか？　ならこの戦をほとんどに勝っておけば、国はともかく周辺諸国は黙っていると思うが」

国にとって重大な脅威ならば、他国からの援助を求めるであろうが勝てるか勝てないかの微妙な線であればそれも躊躇われる。

そうやってこの国の価値を同盟から保護の対象に下がるまで力を削ぎ、そして親亜人派の者を上に立てることによって俺達の地位を確立すべきではないだろうか。

「言うておくけど、この国と友好的な付き合いなんて考えないほうがいいわ。何故なら、私達は子供を誘拐した重罪人なわけだし」

「……本当にお前は余計なことをしてくれたな」

俺がじと目で睨むとベルフェゴールはカラカラと笑いながら。

「だって亜人だけ連れてきて終わっちゃうなら、きっとコウイチはそこで妥協したでしょう？　それだと困るからここまでしたのよ」

「何が困るのか訳を聞かせてくれ」

「まず1つはシヨコラ達狼族の感情。彼らは国を再興するのが目的だから絶対に不満が出るでしょうね……そして」

ベルフェゴールはここで一拍を置く。

「ここで私達が国を乗っ取れば世界が動くのよ」

「その根拠は？」

「私はこの大陸中を見て回っていたのよ。そして亜人達の不満というのは結構限界にまで来ている。こんな時に亜人の集団が人間の国を打ち倒したなんて報が流れてごらんない。触発され、あつという間に大陸中に広がるわ」

「だから各国は他の国に構っている暇はなくなると？」

「そうね。私達はその隙にリーメンダークを完全に掌握し、亜人が差別されない国を造る」

なるほど。

機は熟したと。

この差別溢れる世界を壊すのに最適な時が今だと言いたいのだな。

俺は椅子に腰かけて深くため息を吐く。

「一応聞いておくが、もし亜人達が蜂起しなければどうなる？」

「早速他国がこの国に介入し、私達は重罪人と烙印を押されるでしょうね」

「それは大きな賭けだな」

「その代わり、報酬も大きい。もし成功すればあなたの名は歴史に刻まれるわよ」

「亜人達の反乱を促した大悪人が、それとも古の亜人王の復活か」

「そういうことね。どちらに転んでもコウイチの名が残るわよ」

ベルフェゴールは笑いながらそんなことを述べる。

と、ここで俺は1つ気になったことを聞いてみる。

「ベルフェゴール、お前は決して俺の味方ではないな」

その問いかけにベルフェゴールは軽薄な雰囲気を消し、代わりに壮絶な笑みを浮かべた。

「……すまない、忘れてくれ。」

何があるうともう賽は投げられているんだ。これから先ベルフェゴールの協力なしでは国の統治は不可能。

ベルフェゴールの思惑が何であろうと俺に反対できる立場ではないので聞くだけ無駄だった。

が、それでも俺は釘をさしておく。

「ベルフェゴール、言っておくが俺は善行を積み上げなければなら
ないんだ。だから善に反するような行爲を行つ場合、俺は例えお前
の言うことであつても従わないからな」

転生はある。

ゆえに、俺は永く生きようとは思わない。

それが俺の信念に反するのであれば、例え全てを巻き込むことで
あつても俺は躊躇しない。

「……ご安心を、亜人王」

ベルフェゴールは畏まった表情で膝をついて俺の手の甲を取る。

「今は深い理由を述べるなど出来ませんが、私は人間を弾圧し
ようとは考えていません。ただ、亜人の子と人間の子、そして神人
の子が同じテーブルで笑いながら話し合っている光景を見るため
です」

「それはベルフェゴールが抱いていた夢か？」

ベルフェゴールは首を振って。

「いえ。愛する者——ダグラスが実現しようとしていた理想です」

その言葉を最後にベルフェゴールは俺の手の甲に額を付けた。

4話 暗躍（後書き）

ありきたりの流れかもしれませんが、それでも受け入れてもらえる
と嬉しいです。

5話 悪魔の罠

「ふふふ……亜人共め、我ら人間の恐ろしさを見せてやる」

わし——バルギ〃マートピア〃カテナは目前に聳え立つ城壁を見てそうほくそ笑む。

日頃から鍛錬を欠かさんかったこともあり、わしは30年下の20の小童程度では後れを取らんほど鍛えられておる。

コルギドールが反乱を起こしたと聞いた時、わしはしめたと思った。

何せあの街は亜人を多数召抱えていることを除けば、とても良い金づるだったからだ。

まだ小規模ながらあの街から収められる税金は国内でも有数の高さを誇っているんじゃ。

聞くところによるとあの街に住む唯一の人間であるタカハラとやらがその資金源らしい。

わしはその人間に何度も好待遇で迎えるからこっちに来るよう何度も使者を送ったのだが、タカハラは理由を付けてその申し出を断っていた。

おそらくタカハラはあの犬の亜人を始めとした奴らに監禁されているのだろつ。

いくら奴らがいないところで翻意を促してもタカハラは首を振らない。

1つの動作で良いんじゃない。

ここから出たいという申し出に頷いてさえくれれば、私はすぐに軍隊でも差し向けてタカハラを救いに参ったであろう。

だが、結局タカハラはその申し出に頷かなかった。

おそらく『もし出ていけば殺す』と、亜人の恐怖が精神の奥まで刷り込まれてしまい、頷くことが出来ない状況なのだと考える。

全く、本当に亜人は欲深い。

良い物を囲い込み、独占しようとするのはまさしく獣そのもの。

ゆえに、そんな状況を憂いたウェスパニアの実力者がタカハラを救いだそうと計画を立てたのだが、何と奴らは神人である魔族を引っ張り出し、ウェスパニアに住む子供を攫っていきおった。

これは許せん。

亜人はどうでも良いとして、未来ある子供達を攫うとは何事か。

だが、これで敵の正体が分かった。

タカハラはあの魔族の差し金によってコルギドールに居続けると深い暗示をかけられているのだ。

だからこちらの誘いに乗ってくれなかったのだ。

これが亜人だけならわし直属の兵隊だけで良かったのだが、魔族がいるのなら別。

魔族の幻術によって士気の低い亜人は使い物にならないだろうから、国の救助が必要だ。

そのわけで周辺の貴族や国王に直訴したところ、何と総勢1万という兵が集まった。

女子供を含めたコルギドールの全住民の数でも5000程度であることを鑑みると、もはや勝負にならないだろう。

が、わしは喜ぶ将校をよそにそつと唇を噛む。

国王も周辺貴族もこの戦が終われば、兵の貸与を口実にタカハラを差し出せと命令してくるであろう。

そついうわけにはいかない。

タカハラは金の卵の様な存在だ。

例え国王相手でも渡すわけにはいかん。

なのでわしは近くの側近を呼び寄せる。

「……コルギドールを陥落させると同時にタカハラを秘密裏に救い出せ」

わしの命令を聞いた側近を見ながら一つ頷く。

これで大丈夫だ。

国王には、タカハラは行方不明だと伝えておこう。

そしてタカハラはわしの屋敷の地下にある場所でその力を存分に振るってもらう予定じゃ。

そしてその金で……

わしはタカハラを得た後のことを考えると、枯れた野心が芽生えて力がみなぎるのを感じた。

「カテナ伯爵！ コルギドールが見えてまいりました！」

側近の報告を聞いた私は知らず笑みを浮かべる。

「ようやく敵の本拠地に辿り着けたな」

ここまでの道のりは予想より辛かった。

亜人どもは魔族の他にもエルフや巨人族をも擁しているから、一筋縄ではいかんだろうと予想していたのじゃが、正直ここまでとは思わなかった。

夜営中、魔族に惑わされた兵が錯乱し、同士討ちの他に銅鑼や鉦を打ち鳴らして我らの安眠を妨害してきおるのは予想が付いておっ

た。

エルフの魔術による霧によって視界不良へ陥り、進行速度が遅くなつて夜営の回数が増えたことも許容範囲。

が、至る箇所に巨人が作り上げた土壁や塹壕が存在し、亜人がそれを楯に抵抗してくるのはさすがのわしも参つた。

夜営時には同士討ちや夜討ち、そして騒音によって悩まされ続けるので疲労は減るどころか溜まり、移動中、霧に乗じて敵が襲いかかってくる危険性から行軍速度が遅くなり、そして士気が上がらないので余計に土壁や塹壕を崩すのに時間がかかり、さらに夜営の回数が増えるという悪循環に悩まされ続けた。

1つ1つは大したことはないが、3つあわさると絶大な脅威になることをほとほと実感してもうた。

が、それももう終わり。

後はあの深い塹壕と土壁、そして城壁を乗り越えればコルギドルへ辿り着く。

報告によるとあの土壁は水分を含んでいるので崩すのは難しいとのこと。

なあに、それなら力で押し切れれば良からう。

こちらは8000ほどにまで減らしてしもつたのだが、ここさえ乗り切れれば終わりだということに兵を含めた全員が知っておるのだらう。

ここまでさんざんやられた恨み辛みもあり、全員瞳に狂気に近い感情を有しておる。

あの敵が出陣するために掘られた2か所の入り口から突撃すればあつという間にけりが付く。

例え罠が隠されておろうとも、この圧倒的な数の差ではどうにもならんじやろう。

わしは大きな声を張り上げて。

「皆の者！ よくぞここまで耐えきった！ だが！ この苦難も今日で終わる！ 憎き亜人の総本山であるコルギドールは目の前じゃ！ そして！ あの城壁に一番槍を付けたものには向こう10年間遊んで暮らせるだけの褒美を取らせよう！」

タカハラさえ手に入ればそれぐらい安い物。

わしは熱狂している兵を前にそんなことを考えたのじゃ。

ここは両端が切り立った崖なので側面からの攻撃を心配することなく、前方の敵に集中できる。

ここを突破されれば後はコルギドールまで阻む物は何もない。

詰まるところ、私が立っているこの場所が最終防衛地点だった。

「予定通り、敵は一目散に後ろのコルギドールを目指しているわね」

「ああ、シヨコラ。見ての通り、まるで餓えた獣の様だぜ」

ソルトの軽口には私は眼前の光景を見ながら頷く。

前々から建造されていたそれは屋敷を覆う壁とはいかないまでも、高さも堅さも相応のものだった。

もしかするとベルフェゴールはこの戦闘を想定していたのではないだろうか。

そんな予測が頭をかすめた。

「そろそろ敵が城壁に張り付いてきたな」

ソルトの言葉で思索から帰った私は眼前の光景に注目する。

土壁による迷路と高く聳え立つ城壁があろうとも敵の数は私達の20倍近いので、数の暴力に押され気味である。

城壁を守っている亜人達が矢を射かけたり石などを落としているけど、正直焼け石に水だろう。

開始からわずか30分で城壁には無数の掛け梯子が取り付けられてしまった。

「そろそろ良いわね」

見る限り向こうは少数の護衛のみを残し、残りの全兵力をこっちに差し向けている。

敵は完全にベルフェゴールの術中に嵌った。

向こうはご丁寧にも左右にある2つの入口から突入してきている。

完全に血が上り、そして欲に目がくらんでいる人間には分からないでしょうけど、上から見れば2つの入り口から入った兵隊は中で合流していないのよ。

出入り口も2つであっても陣は1つだと思うでしょうがその実、陣は2つあるのよ。

真ん中に堂々と立っている城門を境にして兵は分断させられている。

崖 壁門壁 崖

崖陣陣陣壁 壁陣陣陣崖

という風に並んでいるわ。

そして門からはあの後ろの方でふんぞり返っている領主へ繋がる道が出来上がっている。

まあ、空から見渡せる鳥人がいればこの事態に気付くんでしょうけど、ここまで数の差があるのだから偵察など必要なく、むしろ謀反を起こされたら困るとかで連れてこなかったし。

「火矢、準備！」

ソルトがそう号令を掛ける。

あの土壁には水の他に油も染み込ませているのよ。

もしあんな混雑している中で火を掛ければどうなるのでしょうかね。

「行つて来るわ」

私がそうソルトに言う。

「部隊の皆は銀狼の邪魔をしないように言い含めてある」

へえ、変なところで気が効くじゃない。

表情に出ていたのかソルトはニヤリと笑いながら。

「誰もお前を止める者はいない。思いっきり暴れてこい」

私の背中にそんなことを言い放ってきた。

5話 悪魔の罠（後書き）

人間にとって天敵だと思える存在であるベルフェゴールだけは敵に回したくありませんね。

6話 それぞれの窮地

「なっ!？」

突然の事態にわしの頭は思考停止へと陥った。

つい先程までコルギドル産のワインとチーズを食べながら戦況を見守っていたのじゃが、目の前の土壁が炎の壁へと変わった瞬間それまでの戦勝気分が吹き飛んでもうた。

怒号と悲鳴が相次ぎ、兵は我先にと出て行こうとするが8000弱の人数がいるので出てこれそうにもない。

「落ち着け! 落ち着かんかあ!」

わしは大声を張り上げて事態を鎮静化させようとするのじゃが、元々借り物の兵のため大多数の者が聞く耳持たん。

このままでは同士討ちが起こってしまう。

彼ら兵は横の繋がりが希薄のため、自分が所属する隊以外の兵は障害物として見なしているかもしれない。

「……いや、もう起こっているか」

この炎の勢いだと起こることの方が必然。

おそらくこの土壁の中では阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられているだろう。

「おのれ、亜人共め。この借りは必ず返すからな」

この策によって大多数の兵を失ったが、まだ数はこちらの方が有利。

兵の士気は下がるところか、一杯喰わされたとして雪辱に燃えら
だろつ。

二度とこんなヘマはしない。

わしはそう誓った。

「ん？ どうし——」

背の高い側近が門の方向を見て何か喚いていたので、そちらに目
を向けると。

「城門が……開いた」

ここからだと微かに城門の上端部分が辛うじて見えるのだが、先
程まで閉じられていたそれは大きく開かれていた。

「——っ！ 不味い！」

これは何かとてつもなく嫌な予感がする。

わしはその直感に従って急ぎ退却しようとするのじゃが、行動を
起こすより先に1つの影があゝ土壁の向こうから姿を現しよった。

炎を背景にナイフを構えたメイドがこちらを睨んでいるという非常識な光景にわしを含めた全員がしばし魅入る。

よく見ると端正な顔立ちじゃのう。

銀色の髪と氷のような瞳、そして均整のとれた体つきのあのメイドは相手が亜人であろうとも欲情が湧いてきよる。

そういえばコルギドールへ赴いた使者の内何人かはあのシヨコラとかいうメイドに心を奪われ、よく似た亜人を欲しがっていたのを覚えてるわ。

その時は下らないと一笑に付しておったが、実物を見ると彼らの考えもわかる。

「皆の者！ あの先頭に立つメイドは殺すな！ 生かして捕えよ！」

後方から次々と犬の亜人が飛び出してきよるが、たった20人程度じゃ。

亜人の身体能力がいかに優れていようと、こちらは500人も控えさせておるので多勢に無勢。

ここまでの数の差があればシヨコラとかいう亜人を無傷で捕えることができるじゃろう。

そしてできることならわしの下へ侍らせてやりたいものじゃ。

息子が欲しいといっても渡さん、わしのお気に入り1人じゃな。

「あのメイドに傷をつけるなよ！ 付けただけでは許さん！」

「本当に人間って馬鹿ね」

奥でふんぞり返る人間の命令によって兵は槍や剣の代わりにロブや網に持ち替え始めたのを見ながら私は冷笑する。

まあ、向こうが抱く感情も理解できるわ。

奇襲に慌てたもののこちらはたかが20人で、向こうは25倍の500人。

そして別に攻める必要はなく、向こうは亀の様に固く守っていれば徐々にあの炎の海から生還した兵が戻ってくるので、時間が経つことに兵が増強されるのだから勝ち戦と信じて疑わないだろう。

数の多い方が勝つ。

それは確かに真理だけど、その真理の大前提となるのが自分と相手の質が同等な場合のみ。

脆弱な人間と戦闘種族である狼族と一緒に考えることが間違っているのよ。

神人は1人で1000の人間の兵隊を相手にすることができる。

そして私達狼族は10人揃えば神人を打倒することができる。

つまり実質戦力は20対500でなく、2000対500。

全く相手にならないわ。

「狙うはカテナの首ただ一つ！ 全員私につき従いなさい！」

私は走りながらそう号令を出す。

人間は何とか私を取り抑えようと必死なんでしょうけど、私から見れば欠伸が出るほど動作が遅い。

人間が1の動作をしている時間があれば狼族は2の動作を、そして私なら5の動作をできる自信があるわ。

それに、コウイチが特注で作ってくれた鋼のナイフは相当切れ味がよく、網どころか鎖帷子もスパスパと切り裂くことができる。

久しぶりの戦場。

見えるものは血の赤。

聞こえるものは断末魔。

鼻につくのは血の匂い。

口中に広がるのは錆びた鉄の味。

感じるものは肉を切り裂く感触。

昔はこの五感から得られる情報に心が震えていたのだけど、何故か今は逆に心が冷めていく。

ただ、淡々と作業を繰り返しているような疲労感が漂う。

「どうしてなのかしら」

100人長クラスの指揮官を葬った私は何となく呟く。

あの時の感動はどこに行ったのか私は自問を繰り返す。

けれど、答えなど出ず、私は黙々とナイフを振り回し続ける。

「た……助けてくれ」

腰を抜かしているカテナがそんなことを呟いているのが聞こえる。

彼の周りの護衛はすでに私の手によって物言わぬ肉塊に変えられているので、身を守る者がいないのだろう。

ふと周りを見渡すと、私の突撃によって烏合の衆へと陥った人間が狼族によって狩られているのが目に入る。

勝っているはずなのに。

憎き人間を殺しているはずなのに私の心は全然晴れない。

と、ここでコウイチの顔が思い浮かんだ。

あいつは常識知らずで、殺しに來た私に対しても偏見で見ることがなかった。

そしてアロウやハクア、ベルフェゴールやルクセンタールそしてギアウッドなど屋敷に居候している面々の顔を思い出す。

「ああ、そういえばそうだったわね」

ようやく疑問に対する答えが出た。

「私はあの空気が好きなのよね」

屋敷の管理人としてコウイチや他の屋敷の住人とまったりと暮らすあの時が大好きなのよ。

あそこにいると私の心が落ち着く。

何もしなくても、私の存在を認めてくれるあそこが私の居場所なのよ。

そこまで考えた私はカテナを見下す。

私の体は便利なもので、いくら私が思考の海に沈もつとも体は忠実に動いてカテナをの頸動脈を搔っ切っていた。

この恐ろしいほどの冷酷な私は銀狼と味方からも畏怖されていたのよ。

まあ、唯一ソルトだけは尊敬や恐怖を度外視して見てくれたけどね。

「敵軍総大将！ カテナを討ち取った！」

私はカテナの亡骸を高く上げると、人間は戦意を失って次々と投降したので戦闘は終わったわ。

「捕虜4000人、死者2000人そして逃げた者が2000人か」

ベルフェゴールから挙げられた今回の戦果について聞いた俺は嘆息する。

「どうして溜息なんかつくのかしら？ こちらの死傷者は500人中50人も満たないのよ、これほどの大勝利なんて歴史を見てもそうざらにはないわ」

ベルフェゴールもこの結果に多少興奮しているらしい、普段より噛みついてくる。

「なに、これから先のことを考えるとな」

1万もの人間の兵がわずか500ばかりの亜人によって撃退された。

この事実は瞬く間に国どころか大陸全体に広がり、亜人たちの蜂起が活発化しているらしい。

「今度は国も本腰を入れるだろうな」

リーメンダークは国としての面目を潰された形となり、形振り構わず鎮圧に動くことは容易に予想できた。

リーメンダークが動かせる兵力は人間だけで5万。

もし鎮圧できなければ国の存亡にかかわるため、向こうも必至だ。そしてそんな俺達は追い詰められた国の軍隊に加え、莫大な数なと相手にできないだろう。

俺はそんな心配をしているのだが、ベルフェゴールは何でもない風に笑う。

「何、安心して。ちゃんと考えてあるわ」

さらに続けて。

「石兵八陣」

ベルフェゴールは唄う。

「5万という大軍を動かそうとすれば必然的に経路は限られる。国軍の集合場所からコルギドールへ向かうためには1つ大きな河の近くを通らなければならないのよ」

そして両手を大きく広げながら。

「これでこの国は完全に掌握できるわ。そして各国の亜人が蜂起しようとも失敗した亜人を保護し、また蜂起しようと計画している亜人たちに援助をする。そして大陸を動かすのよ」

ベルフェゴールは恍惚の面持ちでそう呟いているのが俺にとって印象的である。

「これは乾坤一擲の大勝負。もし失敗すれば亜人の解放は数百年遅れてしまうから失敗は許されないわ」

「まあ、すでに乗りかかった船だ。最後までついていくしかないな」

真剣な様子で宣言するベルフェゴールに俺は息を吐きながら呟くと。

「あら、意外と素直ね。あなたのことだからもつと反対するかと思っていたけど」

意外とばかりにキョトンとするベルフェゴールの言葉に俺は笑う。

現在LUCK - 120367

殺した人1人につきLUCK - 10

独立を宣言して国から土地を奪い取ったからLUCK - 100

が、コルギドールを完全な支配下に置いたので1日につきLUCKが+100ずつ上がっている。

ここまで来たら国を取るしかない。

なるべく早くこの戦乱を終わらせる必要がある。

それしか今後100万にまで届きそうな莫大な負のLUCKを返済する方法がない。

だから、なあベルフェゴール。

俺も絶対に失敗するわけにはいかないんだよ。

ベルフェゴールは俺がなぜ笑っているのかわからず、首を傾げていた。

6話 それぞれの窮地（後書き）

少しコウイチがダークに入ってしまった。
けれど、次の話には元に戻るのでご安心を。

後、人間と亜人、神人の3種類はじゃんけんのような関係です。
人間は亜人に、亜人は神人にそして神人は人間に強いです。

7話 葛藤（前書き）

今回は主要キャラ未登場です。

7話 葛藤

「報告します！ 先鋒隊500名が、あの石で作られた迷路に入ったり連絡が取れません！」

連絡将校からの報告に私——リーメンダーク軍亜人混合師団将軍、デザイア「クランク」ドメアは奥歯を噛み締める。

「あの霧さえなければこんな事態にならないものを」

そして瞳孔が限界にまで見開き、さらに体中の毛が逆立つのを感じた。

「将軍……」

私の怒りが伝わったのだろう、連絡将校が2、3歩後ずさる。

「それにしても何故コルギドールの亜人達は反乱など起こしたのだ？ おかげで陛下の苦勞が水の泡だ」

「デザイア将軍は陛下によって見出されていましたね」

連絡将校の言葉に私は頷いて。

「そうだ、マルス陛下の恩によって半亜人である私を取り立てて下さった」

半亜人とは亜人と人間のハーフであり、そのどっちつかずな様子から人間と亜人の両方から忌み嫌われており、その待遇は亜人より

もさらに酷い。

が、リーメンダークという国は他国に比べるとまだ半亜人に対する風当たりが柔らかい。

私は高級軍人とその奴隷から生まれた娼婦の子だったが、陛下にその実力を認められて一軍を任させられる将になった。

もちろん当時は相当反発されたが陛下が押し切り、そして私もその期待に応えるように多大な働きを見せたため、今では誰も後ろ指をさせない状況になっている。

しかも陛下はそれだけに留まらずに亜人の立場を上げるための方針を掲げ、保守派の大臣と日々暗闘していた。

コルギドールの面々は陛下の苦勞を理解しているのか。

お前達のせいで陛下は窮地に立たされ、その王の座を追われかけているのだぞ。

だから何としても反乱軍を早期に鎮圧させなければならないのだが、それをこの先にある石と霧の迷路が行く手を阻む。

あの石と霧の迷路を通っていると徐々に方向感覚が狂い出して同じ道を行ったり来たりし、ついには遭難してしまうらしい。

なのでそれを壊すための工作部隊を送り込むのだが、敵の抵抗があつて難しいうえに壊す端から直されるので芳しい成果は挙げられていない。

空を飛べる鳥人を偵察に向かわせてもあの石の迷路中を漂う霧が邪魔をし、さらに長く滞在していると霧に乗じた敵兵によって撃ち落されてしまう。

「早く鎮圧せねばなんのに」

国から1か月以内に反乱軍を鎮圧しろという命令に私はすぐさま名乗りを挙げた。

この亜人達の反乱を人間の手で抑えられたら、将来亜人達の立場が酷くなると容易に予想がついたからだ。

まあ、それでも私達1万の軍は後ろに控えている5万という人間の軍によって監視され、武器や防具そして食料の全てを向こうに抑えられている状況だが。

「こう私が手をこまねいている間にもマルス陛下の立場は刻一刻と厳しくなっているんだ……」

私がそう愚痴を吐いていると。

「報告します！ 後方に控えているリーメンダーク軍の監察官が將軍に面会を求めています！」

大方この遅々として進まない状況に苛立っているのだろう。

やれやれ、また小言を言われるのか。

私は肩を竦めてため息を吐き出した後、すぐに参ると伝えた。

「いったいどうなっている！ お前達はずっとそこで待機しておるではないか！」

枯れ木のような痩せぎすの監督官は唾は吐き散らしながらそう喚く。

「……申し訳ありません。あの迷路の攻略法を探しているのですが、良い方法が見つからず。立ち往生しているのが現状です」

「ならばさっさと探せば良いではないか！」

それが出来たら誰も苦労しない。

私はその言葉をありったけの精神力を込めて押し込め、代替案を提示する。

「ただでさえ迷路が難解に加え、さらに霧まで出るともはや攻略には多大な時間と労苦が伴います。なのでここはこの道を迂回し、別の方法を探すというのは如何でしょうか」

何もあれを通らなければならぬ道理はない。

他の道もあるのだから、少し遠回りになるがそちらから進行すれば良いと考えるのだが。

「ならぬ！ 他の道だと我々5万の大軍が移動できず、お前達に対する監視が薄れてしまう！」

これの一点張りである。

「どうやら正規軍は私達に手綱をつけておかねば安心できないらしい。」

私は反旗を翻すことなど毛頭ないというのに。

「今の状況を分かっておるのか？ 我が方では鎮庄に時間をかけられないんだぞ！」

そんなことは言われなくとも分かっている。

先の反乱軍はわずか500という寡兵で10000という大軍を打ち破ったという事実が広まり、各都市に住まう亜人たちが声を上げ始め、蜂起したり持ち場から逃亡が相次いでいるという状況だからだ。

向こうはこうしている間にも亜人が増え続けている。

つまりそれだけ国力が減少しているということであり、たとえ勝ったとしても国に大きな禍根を残してしまう。

何せ亜人達が従事していた仕事は大部分が忌み嫌われる類のもので、人間はやろうとしない。

しかし、誰かがやらなければあらゆる場面に影響が出てしまう。

特に軍隊や農作業などの肉体労働。

この2つが深刻で、例えば今回の反乱に参加した亜人の罪を全員免

除すればすぐに取り戻せるのだが、そんな甘い処罰など上が絶対納得するはずがなく、元の国力に回復するまでは最低5年は掛かると試算されていた。

「もしかするとお前らはわざと遅らせているのではあるまいな？」

「いえ、まさかそのつもりでは」

非常に不本意なことを言われたので私は顔を上げて抗議するのだが、聞き入れられない。

むしろ傲慢な顔つきで。

「ならばさつさと攻めれば良いではないか。言っておくが我が軍には遊ばせておく余裕がないのだぞ」

そうやって功を焦った結果、我が軍は先の先鋒を含む兵3000人を失ったのだがな。

私は心の中でそう反論する。

被害など省みず数に任せてあの石の迷路に突撃していった結果、進むべき方向を見失ってしまった。

先を進んでいたはずなのに霧を抜ければ何故か軍の後方にいたり、横道にそれた兵が帰ってこなかったりと訳のわからない状況の最中に近くの河から水を引き入れられたので我が軍は混乱の極致へと陥ってしまった。

あの時はベルフェゴールとか名乗る老人の手引きで救われたもの

の、兵の内1000が行方不明になり、その後何度も投入した偵察兵も先鋒兵も帰ってこない。

これでもまだ安いものだ。

もしベルフェゴールの案内がなければ我が軍は私を含めて全員水死していただろう。

「全く、これだから亜人は信用ならん。それに対して人間は……」

私のそのような葛藤など知らず、監察官は亜人に対する愚痴へと移る。

この監察官は筋金入りの選民思想の持ち主で、このような非を口実に私達亜人を呼び、亜人が如何に愚鈍で、如何に人間が優れているのかを語り始める悪癖がある。

私は監察官の戯言に時々相槌を打ちながら直立不動の姿勢でじつと耐えている。

本当に、陛下のことさえなければお前など八つ裂きに……

「なんだその反抗的な目は！　これだから穢れた血の者は――」

耐えろ。

耐えるんだ。

感情のままに振る舞えば陛下に危害が及ぶ。

私はどうなっても構わないが、罪が陛下にも及ぶのであれば動いてはならない。

私はただ陛下のことだけを考えることによってこの場を乗り切った。

7話 葛藤（後書き）

マルス陛下は多分次に登場予定です。

……デザイアがエレナ子爵と被って見えてしまうのは、作者の力量不足なのだろうか。

後、半亜人関係は後の話の伏線です。

8話 マルス陛下

「目論見通り、リーメンダーク軍は石の迷路で立ち往生しているな」
会議室に1人いる俺は挙げられている報告を読み終えた後そう零す。

「ふう……今回はLUCKを下げずに済みそうだな」

あの自然を利用した策を思い付いたおかげで、今回の戦は最低限の死傷者だけで済ませられるだろう。おかげでこれ以上LUCKが下がることも無い。

俺は背もたれに体を預けながら安堵の息を漏らす。

「ん？」

少しうとうとしていると扉の向こうから足音が聞こえた。

「コウイチ、予定通り連れてきたわよ」

ここでショコラがノックと共に入室し、ちゃんと目的を果たしたことを伝えてくる。

「うん、分かった。ベルフェゴールと共にすぐに向かう」

待たせるのは失礼だろう、だから俺は思考を中断して向かおうとする。

「いや、向こうはコウイチに会いたいと駄々をこねたから連れてきたわ。だから今私の後ろにいる」

シヨコラが呆れ交じりに呟く様子からよほど煩かったのだろう、犬の耳がペタリと垂れているが、残念ながら俺はシヨコラのように苦笑できなかった。

「後の先を取りに来たか……」

シヨコラの体に争った形跡がないことから向こうは暴れず、素直に同行したのだろう。そして連れ去った相手の親玉にのこのことに来るのは、何も知らない馬鹿かそれともこの事態を予想していた切れ者か。

「おそらく後者だな」

何せこれから来る人物はあの海千山千の怪物である重臣達を相手に亜人そして半亜人の保護政策を推薦させたという実績がある。

「念のため聞いておくがその人物は本物だろうか？」

ここまで危ない橋を渡っておきながら実は偽物でした、なんてなると目も当てられない。

「ちゃんと本物よ。私の嗅覚を舐めないで頂戴」

どうやらシヨコラは匂いで見分けたようだ。

「……何だそれは？ まあ、実際シヨコラが言うのだから間違いはないだろう」

と、俺が呆れ混じりにそう呟くと。

「匂いとは失礼な言い方だな。それでも余は清潔好きなのだぞ」

シヨコラの言葉を聞き咎めたのだろう。

シヨコラの後ろから棘のある言葉と共に1人の人物が進み出る。

その者は今から25年前に生まれたらしいのだが、目の前の人物はどう見ても中学生ぐらいにしか見えない。

金色の髪と青い瞳が印象的な端正な顔立ちから、良い所のお坊ちゃんだと錯覚するのだが、それはすぐにその者から溢れ出る品格によつて打ち消された。

「おお、そなたが亜人達の反乱のリーダー——コウイチか。余は一度会ってみたかったのじゃ」

好奇心と喜びを混ぜた表情を浮かべてこちらに寄つて来るのだが、その表情を額面通りに受け取るにはいかない。

「いえいえ、こちらこそ突然の無礼をお許し下さい」

「そんなに畏まらないでくれ。今の余は何の権力も持つておらんただの者、むしろこちらが頭を下げるべきなのじゃ」

俺は跪いて臣下の礼を取ろうとすると、目の前の人物がそれを押し止めてきた。

「そなたも知っておると思うが、一応自己紹介しておこう。余の名はマルス。マルスⅡリーメンダークⅡパラスギアじゃ」

リーメンダーク国の王——マルスはそう高らかに宣言した。

「まずは礼を言わせてもらっ、デザイア率いる軍の被害を最小限に済ませてくれて感謝する」

シヨコラが退出し、会議室には俺とマルスの2人だけとなった時にマルスがそう口火を切る。

「気にしなくても良い。犠牲は少ない方が良い」

人間であろうと亜人であろうと殺せばLUCが下がるので無暗に殺すわけにはいかないのだ。

俺はありのままにそう述べたのだが、マルスは何がおかしいのかクククと笑いながら。

「言うは易し、行ふは難し。簡単に言ってくれるがそれを実行するにはどれだけの苦勞があつたのか、そしてそのことを微塵にも感じさせぬとは皮の面が厚いのうそなた」

実際に計画したのはベルフェゴールで、実行したのはシヨコラ達亜人なので俺はただここでボーっとし、一切苦勞していない。

「先読みしすぎだ、俺は大したことをしていない」

なので俺はそう手をヒラヒラさせて否定するのだが、マルスは全然信じてくれず、逆に感嘆の目を向けて。

「そうか、コウイチにはよほど優秀な同志がいたのか。うらやましいのお、余なんか唯一デザイアだけが心を許せる者だ」

「……それは大変だな」

「何、気にしなくとも良い。コウイチが余の知恵袋になってくれるのであれば百人力だ」

「ちょっと待て、いつからそんな話になった？」

何故か俺はマルスの力になるという話に進んでいたので俺は慌てて止めるのだが。

「ん？ 違うのか」

そう純粋な疑問符を浮かべて首を傾げられると俺は続く言葉を失ってしまった。

「……とにかく——」

このままだとマルスのペースに乗せられてしまつので俺は適当な返事を返して本題に入ろうとしたのだが。

「ありがとうコウイチよ！」

「なっ！？ ちょっと止める！ 俺は男に抱き付かれて喜ぶ趣味は無い！」

喜色満面の笑みを浮かべたマルスが突然俺に抱きついてきたので、俺はしばらくマルスを引き離すのに時間を食ってしまった。

「……コホン、本題に入って良いか？」

とりあえず俺は一つ咳払いをして話を戻そうとするのだが。

「うむ、主は家臣の言葉を聞かなければならぬからな」

鷹揚に頷きながらマルスは変なことを呟く。

「だから俺はいつお前の家臣になった!？」

「そなたが先程否定しなかったであろう？ 否定の反対は肯定じゃ。つまりコウイチは余の家臣であることを肯定したと捉えたのだが違うかな？」

俺が先程曖昧な言葉を盾に取って煙に巻こうとするマルス。

実はこのやりとりはもう何回も続いている。

俺が何か言おうとする度にマルスが変なことを言うので中々本題に入れていなかった。

俺は内心歯噛みする。

油断した。

シヨコラが押し負かされてここにマルスを連れて来てしまったこ

とからもつと警戒するべきだった。

幾多の権力争いを潜り抜けてきた猛者に対して外見だけで判断していたようだ。

仕方ない。

かなり痛いけど、目の前にいるマルスという王族のカードは捨ててしまおう。

俺はほぞを噛みながらシヨコラを呼ぼうとすると。

「あらあら、シヨコラが言い包められたと聞いて急いで来てみればコウイチも見事にやられているわね」

その声と共にドアが開いて誰かが入室してくる。

そんな人を食ったような声音を持つ人物は俺の中ではただ1人。

「そなたがベルフェゴールか」

「その通りよ。一応解放軍の参謀を務めているわ」

マルスの問いかけにベルフェゴールがゆっくりと頷いて答える。

眼の錯覚かもしれないがこの時2人の間に火花が散った様な気がする。

「ふむ……その奇怪な容貌はまさしく国を滅亡へ導く悪魔じゃな」

微笑を浮かべたマルスから放たれる辛辣な言葉にも関わらずベルフェゴールは笑みを崩さず。

「お褒め頂き光栄です、亡国の王」

普段からは想像もつかない柔らかい口調で腰まで折ったお辞儀で返した。

ベルフェゴールの言葉にマルスは多少唇を引き攣らせながら。

「そなたは冗談が上手いのお、さすがの余も大笑いしてしまったわ」

マルスはそう言うが、実際は笑い声どころか笑みさえ浮かべていないのだが……

「まあ、冗談についてはまた今度にしようかしら。で、本題に入るわよ。マルス陛下、あなたは正式に私達に対して降伏を宣言して頂戴」

ベルフェゴールの降伏勧告にマルスは腕を組んで考える振りを1分ほど続けた後、笑顔でこう言い放った。

「断る」

ニコニコと。

2人は笑っているはずなのに俺は何故かゾクリと寒気を感じた。

8話 マルス陛下（後書き）

コウイチがマルスに言い包められた際の部分は少々強引過ぎたかなと反省しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8128w/>

LUCK - 9999

2012年1月13日01時47分発行